年報

津山弥生の里

第2号（平成5年度）

1995

津山弥生の里文化財センター

はじめに

昨年、「年報津山弥生の里」第１号を発刊致しましたところ、関係者の方々はもちろん市民の皆さんからご好評を頂き、ここに第２号の発刊の運びとなりました。

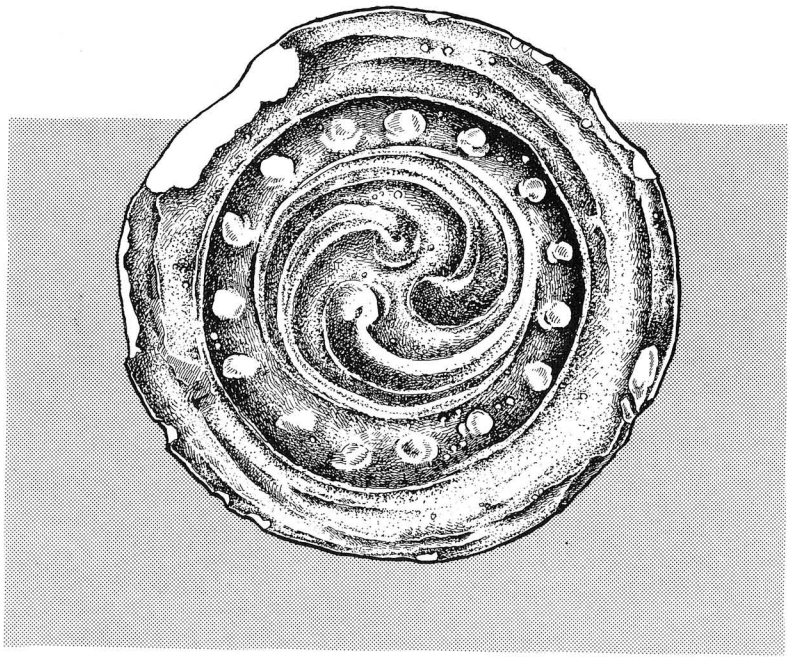
埋蔵文化財行政は地味ではありますが過去の文明・文化を知りこれを現世代に活用する原則からすれば大変重要な仕事であります。

当文化財センターもこのことを十分認識し、澱むことなく静かに着実な成果を上げております。

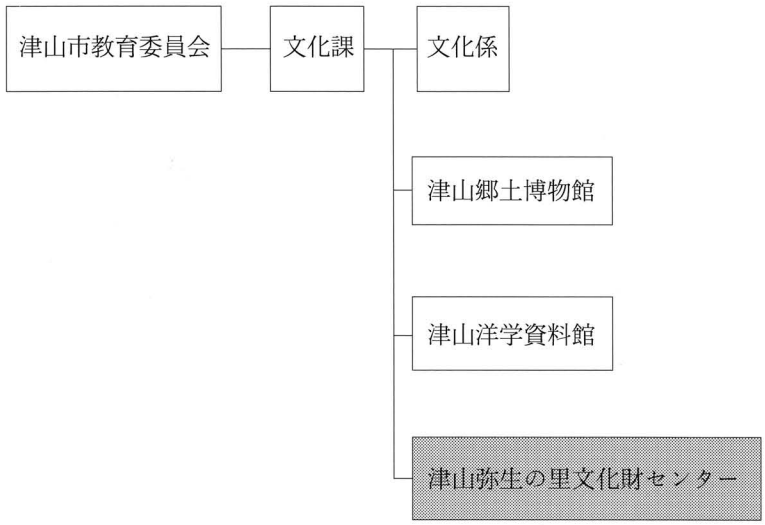
今後も関係者の方々、市民各位のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成７年３月31日

津山弥生の里文化財センター
所長　神田　久遠



津山弥生の里文化財センター機構図



津山弥生の里文化財センター職員配置（Ｈ７．３.31現在）

所　長	神田　久遠（Ｈ６．４．１～）
次　長	中山　俊紀
主　査	安川　豊史
〃	行田　裕美
主　任	青木　睦子（Ｈ６.11.１～）
主　事	小郷　利幸
〃	平岡　正宏（～Ｈ６.10.31休職）
〃	坂本　心平（Ｈ６．４．１～）
嘱託員	野上　恭子
〃	岩本えり子
〃	江見　祥生
〃	家元　博子

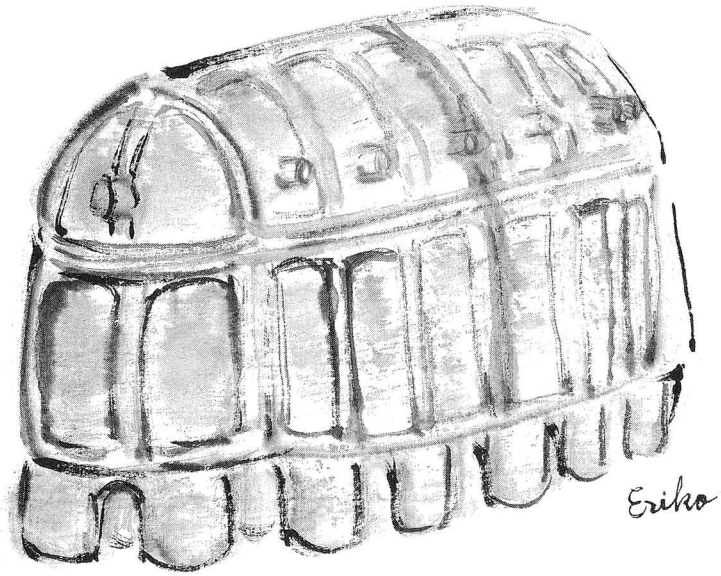
目　　次

1．津山弥生の里文化財センター事業概要 …… 1
（1）展示事業 …… 1
　a．入館者数 …… 1
　b．啓発・普及活動 …… 3
　c．寄贈資料 …… 3
（2）埋蔵文化財発掘調査事業 …… 4
　平成5年度調査一覧 …… 4
（3）その他の事業 …… 4
（4）調査の概要 …… 5
　a．津山城本丸・二の丸確認調査報告 …… 6
　b．西奥田遺跡発掘調査概要 …… 36
　c．美作国府跡(総社小林アパート)発掘調査概要 …… 43
　d．近長四ツ塚古墳群墳丘測量調査報告 …… 50
　e．日上天王山古墳発掘調査概要 …… 56
2．資料紹介・研究ノート …… 58
（1）竪穴住居と生活単位 …… 59
（2）遺物写真撮影雑感 …… 61

例　　言

1．本書は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成5年度に実施した事業概要についてまとめたものである。

1．埋蔵文化財の発掘調査は、当センター中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、坂本心平、出土遺物の整理は野上恭子、岩本えり子、家元博子、民俗資料の整理は江見祥生が担当し、本書の執筆は各担当者が、また編集は小郷が行った。



１．津山弥生の里文化財センター事業概要
（１）展　示　事　業

◆入館者数

「津山弥生の里文化財センター」は開館して４年目になりました。この間に入館された人々の数は、延べ２９，９４４人（平成５年度現在）にのぼります。今年度はさらにこの数字が大きく伸びてくれることを期待したいと思います。

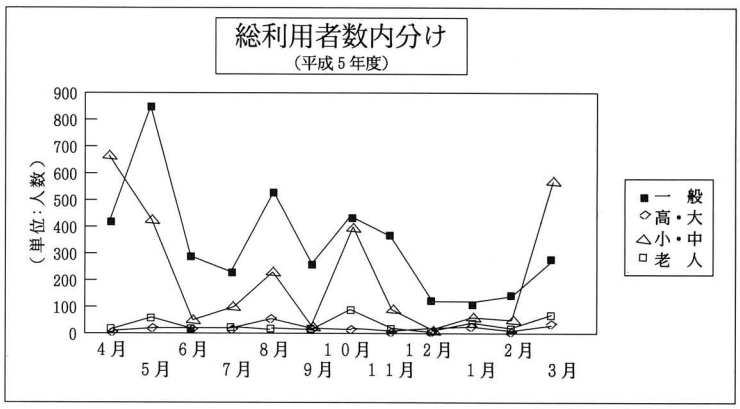
さて、昨年度の当センターへの入館者数は下表のとおりになります。

総利用者数内訳（平成５年度）

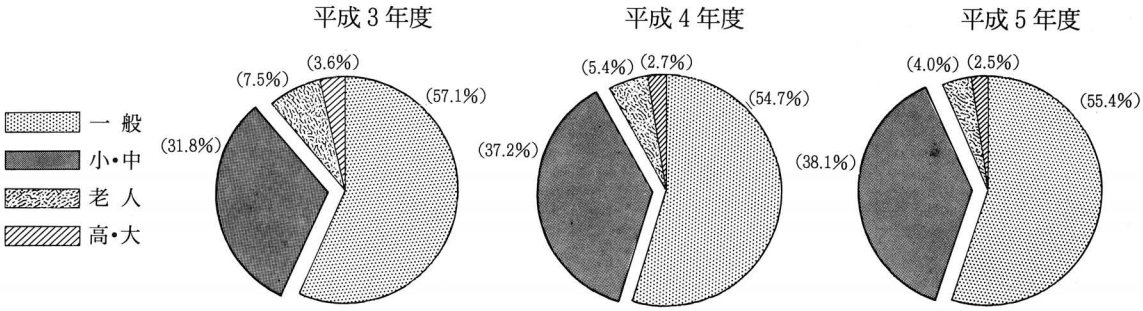
区分/月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	合計
一　般	420	859	311	242	579	278	433	407	138	130	144	297	4238
高•大	23	25	5	16	71	16	5	2	6	4	3	15	191
小•中	686	462	88	120	244	32	408	133	19	93	73	559	2917
老　人	25	56	2	7	14	11	100	5	2	13	7	68	310
合　計	1154	1402	406	385	908	337	946	547	165	240	227	939	7656

これを折れ線グラフにしてみましょう。

一般および、小・中学生がつねにグラフの上位にあること、一般は５、８月が多く、小・中学生は４、10、３月がピークだということが解ります。その理由としては、小・中学生は、学年単位やクラス単位での利用が多く、一般よりも、その出足は学校行事などに大きく左右されるのではないでしょうか。



では、小・中学生の占める割合を今度は円グラフでみてみましょう。（参考に平成３年度からのと比較してみます）



小・中学生が総利用者数の４割近くを占めています。一般の入館者数は５割強ですから、この両者で全体の９割強を占めることになります。当センターは小・中学生に大変よく利用されていることがお解りだと思います。一方、老人や高・大学生の利用は、今後まだまだ増えるものと期待しています。弥生住居址を見たら、その足ですぐそばの「津山弥生の里文化財センター」においでください。興味ある多

数の資料が展示、収蔵されています。皆様のおいでを職員一同、心から歓迎致します。

《民俗資料の収蔵庫について》

津山弥生の里文化財センターは、「米作り」をテーマとした常設展示室を２つ備え、「弥生時代の米作り」と「おじいさんの時代の米作り」を表す展示品を多数収蔵しています。

前者には農具の複製が、後者には明治、大正、昭和初期の時代設定で、農具中心の民俗資料を展示しています。また、民俗資料はこれらの農具だけではなく、三階の第四収蔵庫に、かつての「東苫田民俗資料館」に集められていた多くの資料や、新たに寄贈していただいた資料が収蔵、展示されています。

当館では、従来からこれらの資料を系統立てて、見やすく解りやすい形で収蔵、展示しようとしてきました。

今年度は、

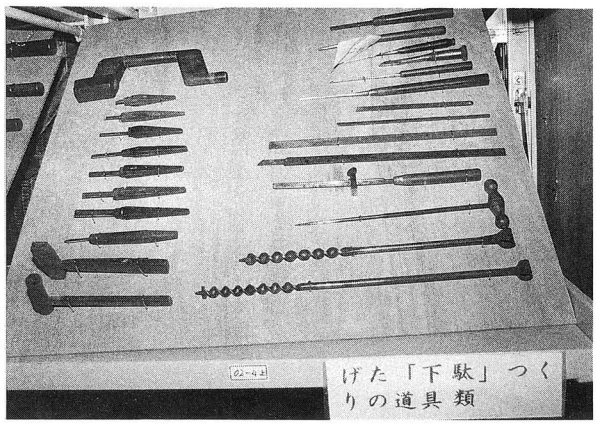
①正面奥に棚を作り、『食の用具』と題して、「貯蔵用具」、「炊事、調理用具」のコーナーを設け、名称及び用途を明記して展示しました。

②収蔵庫内の棚に斜めの板を取り付けて、分類別に、収蔵品の内で比較的平面的なものを選び、解る範囲での名称及び用途を明記したうえ、銅線で固定し、見やすい形で収蔵しました。

③正面右の壁面高所に、上下二本の横木を渡し、従来収蔵庫の棚にあった蓑、笠の類いをこの横木に吊り下げて、立体的に展示しました。

幸いにも、来館者から好評を博しています。　　（江見）

民俗収蔵庫展示風景



◆啓発・普及活動

【刊行物】

◎『年報 津山弥生の里第１号』

◎『別所谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集

◎『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集

◎『大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査第51集

◎『井口車塚古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集

◎『緑山北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第53集

【講演会・研究会】

★第12回　津山市文化財調査報告会

平成５年10月30日（土）　場所　津山市役所２階大会議室

「河辺上原遺跡の調査」　津山弥生の里文化財センター　小郷利幸

「上横野小丸山古墳・大開遺跡の調査」　津山弥生の里文化財センター　平岡正宏

「津山藩５万石の内実」　津山郷土博物館　尾島　治

★美作考古学談話会

第１回５／８（土）遺跡見学会（美和山古墳群）

第２回７／３（土）遺跡見学会（美作国分寺跡－飯塚古墳－河辺上原遺跡他）

第３回９／４（土）弥生土器の製作Ⅰ
（土器づくり）

第４回11／６（土）弥生土器の製作Ⅱ
（土器焼成）

第５回１／22（土）米を炊く－米の調理法と
食べ方について－

第６回３／26（土）討論会

土器焼成実験風景

◆寄贈資料

【考古資料】

植月壮介	軒平瓦１点（美作国府跡出土）
仁木正視	『考古学研究』No.85～150 65点
学校法人 作陽学園	弥生土器整理箱４箱（桃山遺跡出土）
有木邦城	須恵器片17点、鉄刀１点（日上畝山古墳群出土）

【民俗資料】

織田寿男	下駄製作道具一式　約180点
岸本　徹	舞羽車１点、糸巻車１点、笠２点、バスケット１点、銭箱１点、長火鉢１点、和鏡１点 電器扇風機１点

（２） 埋蔵文化財発掘調査

日上天王山古墳（後円部埋葬主体全景）

平成５年度発掘調査一覧

No.	遺跡の種類及び名称	所　在　地	調査原因	区別	遺構・遺物の有無	報告書の有無
1	社寺跡　美作国分寺跡	国分寺492・497	塀設置	立会	遺構・遺物なし	無
2	集落跡　大開遺跡	二宮318他	公園造成	調査	住居跡・古墳　弥生土器等	第51集
3	古墳群他 河辺上原遺跡	河辺字上原1894－3他	宅地造成	調査	古墳３基　須恵器・鉄器等	第54集
4	社寺跡　美作国分寺跡	国分寺483	電柱設置	立会	遺構・遺物なし	無
5	官衙跡　美作国府跡	山北9－3	店舗建設	立会	遺構・遺物なし	無
6	官衙跡　美作国府跡	山北字高橋上47－6	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無
7	官衙跡　美作国府跡	山北字高橋上18－5	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無
8	官衙跡　美作国府跡	総社字乱堂高下104－4	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無
9	生産遺跡 緑山北遺跡	綾部字みどり山1643他	変電所建設	調査	横口付き窯・住居跡　弥生土器	第53集
10	官衙跡　美作国府跡	山北字幸畑13－4	住宅建設	確認	遺構・遺物なし	無
11	墳墓跡　西奥田遺跡	大田498他	道路拡幅	確認	火葬墓　古銭・鉄器	本書
12	古墳　日上天王山古墳	日上417－13	学術調査	調査	竪穴式石槨・箱式石棺 鏡・鉄器	未定

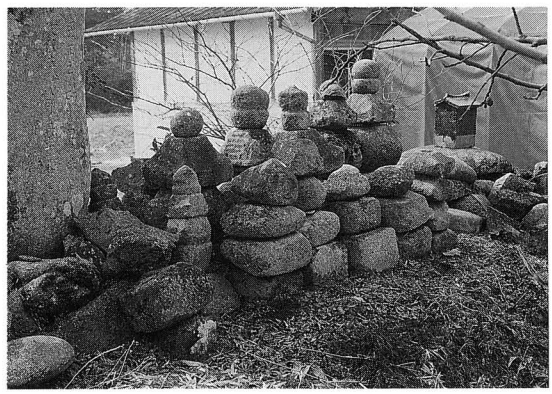
（３） その他の事業

★埋蔵文化財分布調査

平成６年２月４日～３月９日

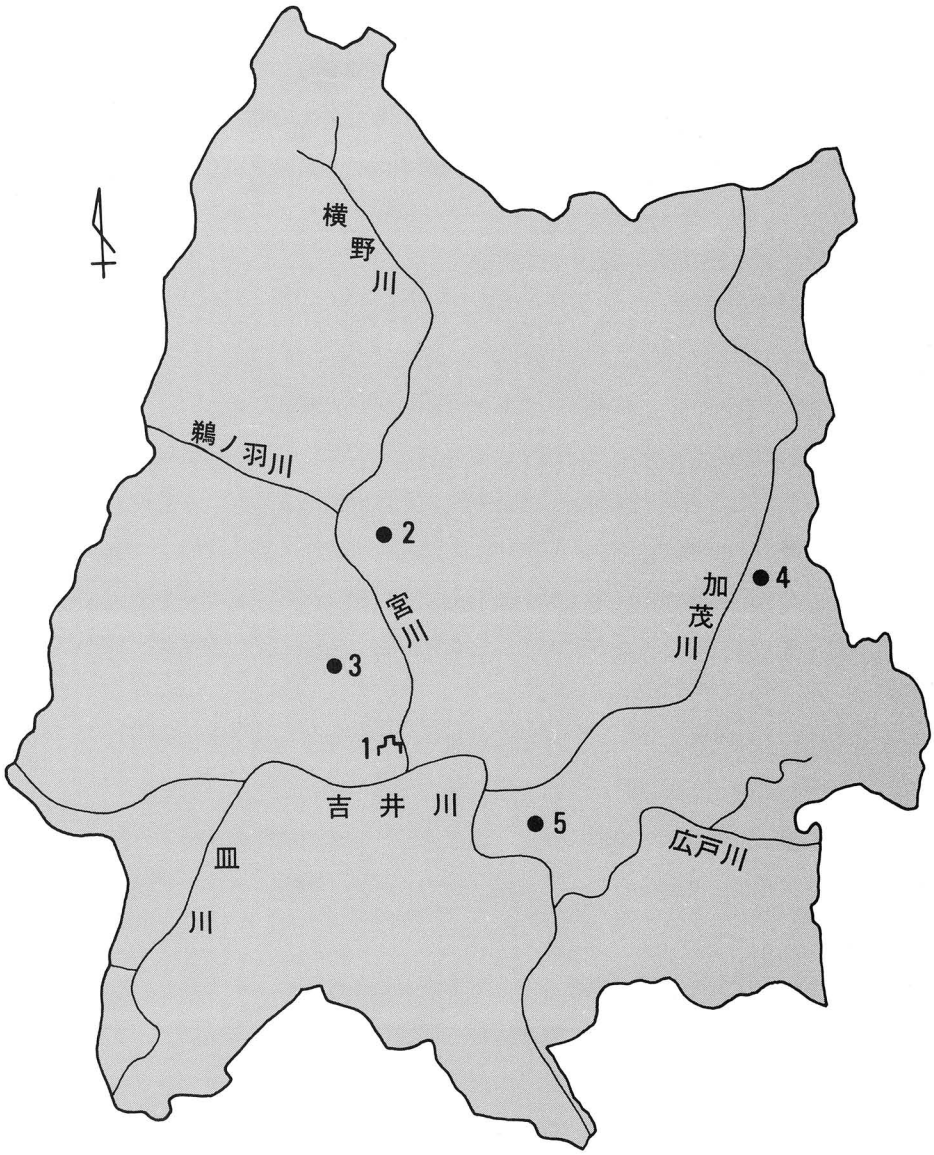
津山市押入・川崎・高野・近長

河辺・河面地域



五輪塔群
（津山市高野本郷）

（４）調査の概要



1．津山城跡　　4．近長四ツ塚古墳群

2．西奥田遺跡　　5．日上天王山古墳

3．美作国府跡

津山城本丸・二の丸確認調査報告

1．はじめに

津山市は津山城跡全域の環境整備事業の一環として、石垣のライトアップ、無電柱化（電気、電話、放送等の有線の地下埋設）、トイレの改修と水洗化事業の実施を決定した。これを受け、津山市教育委員会としては、岡山県教育委員会、文化庁と連絡を取りながらどうしても避けることのできない石段部分は解体して現状復帰するにしても、他の工事箇所については最大限地下の遺構に影響を及ぼさない方向、すなわち遺構の存在する部分は避けて工事を実施するという結論を出した。このため、現存する絵図等を参考にしながら、地下埋設溝掘削工事のルートを決定するための確認調査を事前に実施することを決定した。城郭内での発掘調査は今回が最初である。

以下はその概要報告である。

2．調査の経過

調査は上記工事年度に併せて、平成元年と２年の２回に分けて実施した。

平成元年は二の丸御殿跡を中心とした区域で、９月11日に着手し９月30日に終了した。この間、計８カ所のトレンチ調査と南側の石垣崩壊箇所の基底部の石積状況を確認した。９月29日には津山市文化財保護委員会の視察を受け、指導助言を得た。

平成２年は本丸の調査で建物の中心部を除いた周辺部に計27カ所のトレンチを設定した。調査には７月16日から８月28日までを費やした。８月８日には前年同様、津山市文化財保護委員会の視察をお願いした。

調査は文化課主事行田裕美が担当し、同主事保田義治、木村祐子の協力を得た。

尚、発掘作業は次の方々にお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

（平成元年）谷口虎雄　一岩政志　寺崎辰治朗　木多顕栄　真木力弥　真木博子

（平成２年）津山市シルバー人材センター（川崎、内田、一岩、梶原、木下、石岡）

3．調査の概要

調査は前述のように地下埋設溝掘削工事のルートを決定するためのものであり、それぞれの箇所での遺構を把握しておく必要があった。幸いにも津山郷土博物館蔵の「津山城絵図」、安藤泰樹氏蔵「津山城本丸図」等があり、本丸、二の丸の建物配置の概要はほぼ窺い知ることができる。従って、これらの遺構を避けるルートをあらかじめ想定し、遺構の端の確認、有無のためのトレンチを設定した。

以下、各トレンチの概要である。

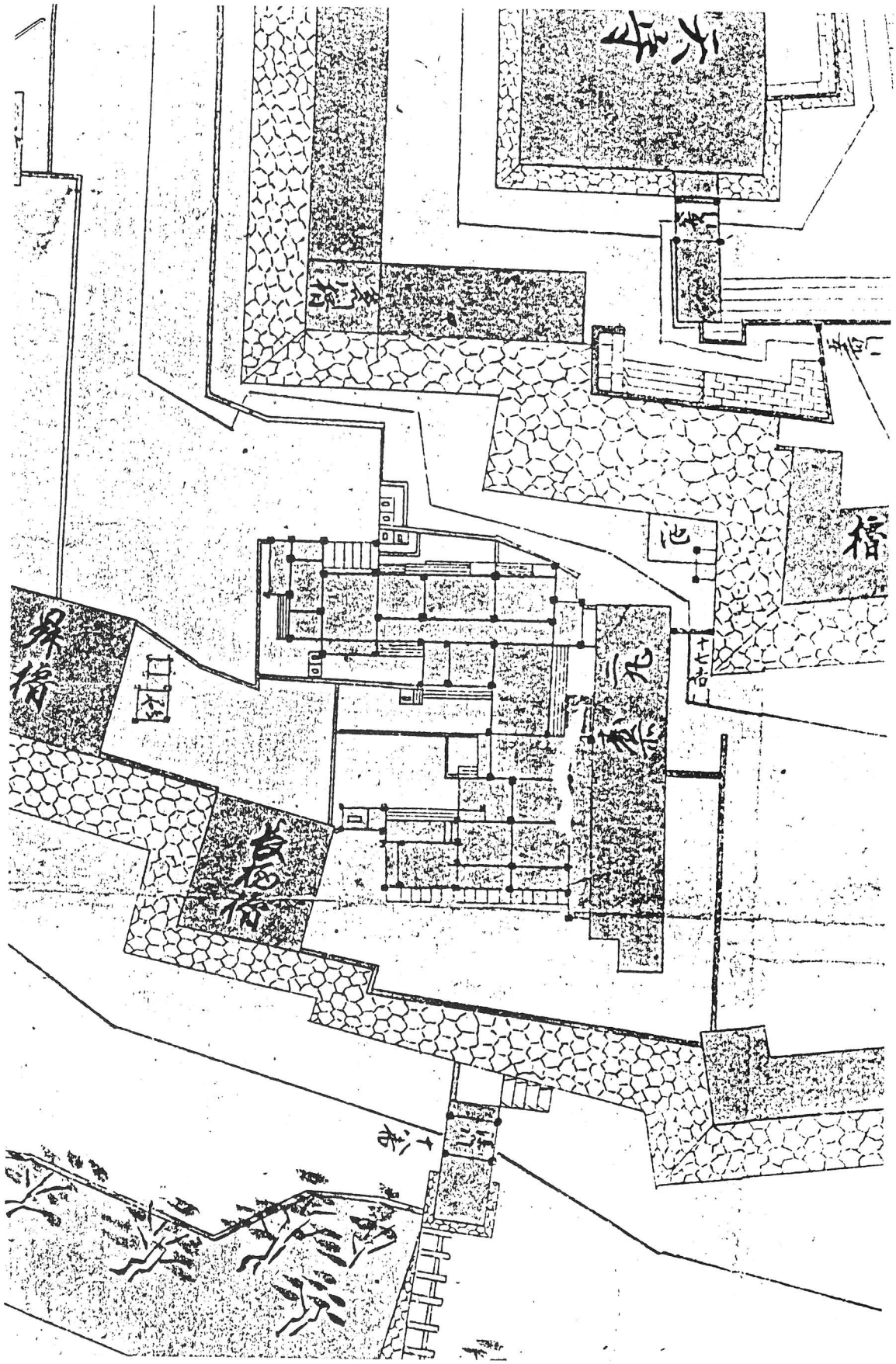
（１）二の丸の調査

Ｔ－１

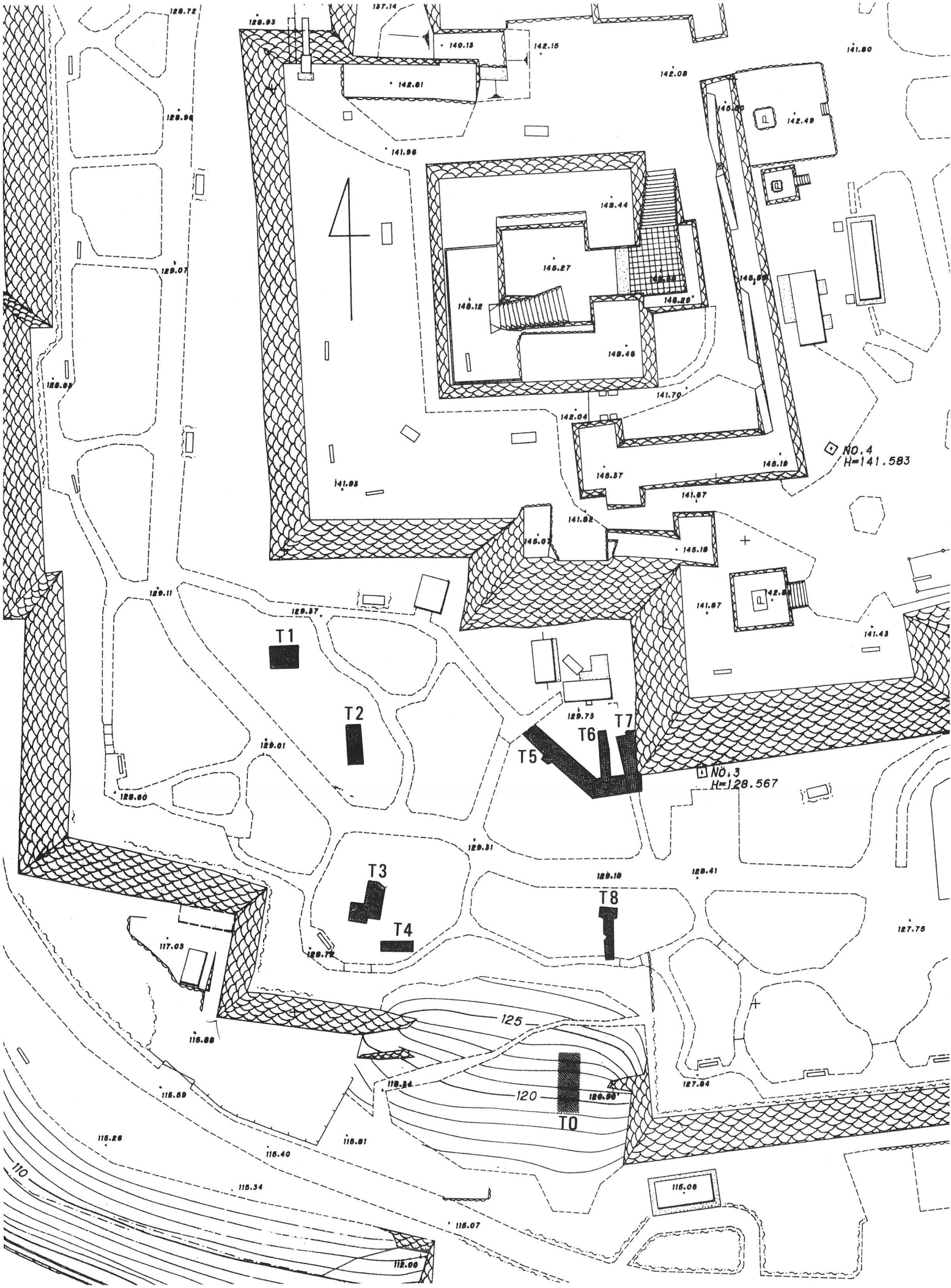
建物の北西隅周辺の状況を把握するため設定した。絵図で見る限りは柱の礎石がかかるはずであるが、検出することができなかった。削平を受けている可能性も考えられる。現地表面から30㎝の深さで地山面に達する。この間の土層には多量の瓦を包含していた。調査面積は5.4㎡である。

Ｔ－２

建物の礎石を確認するために設定した。礎石は検出されなかったが、トレンチの南側に浅い落ち込みが認められた。礎石の抜き取り跡の可能性も考えられる。現地表面から地山面までは50㎝を測る。Ｔ－



第１図　二の丸御殿絵図（津山郷土博物館蔵）

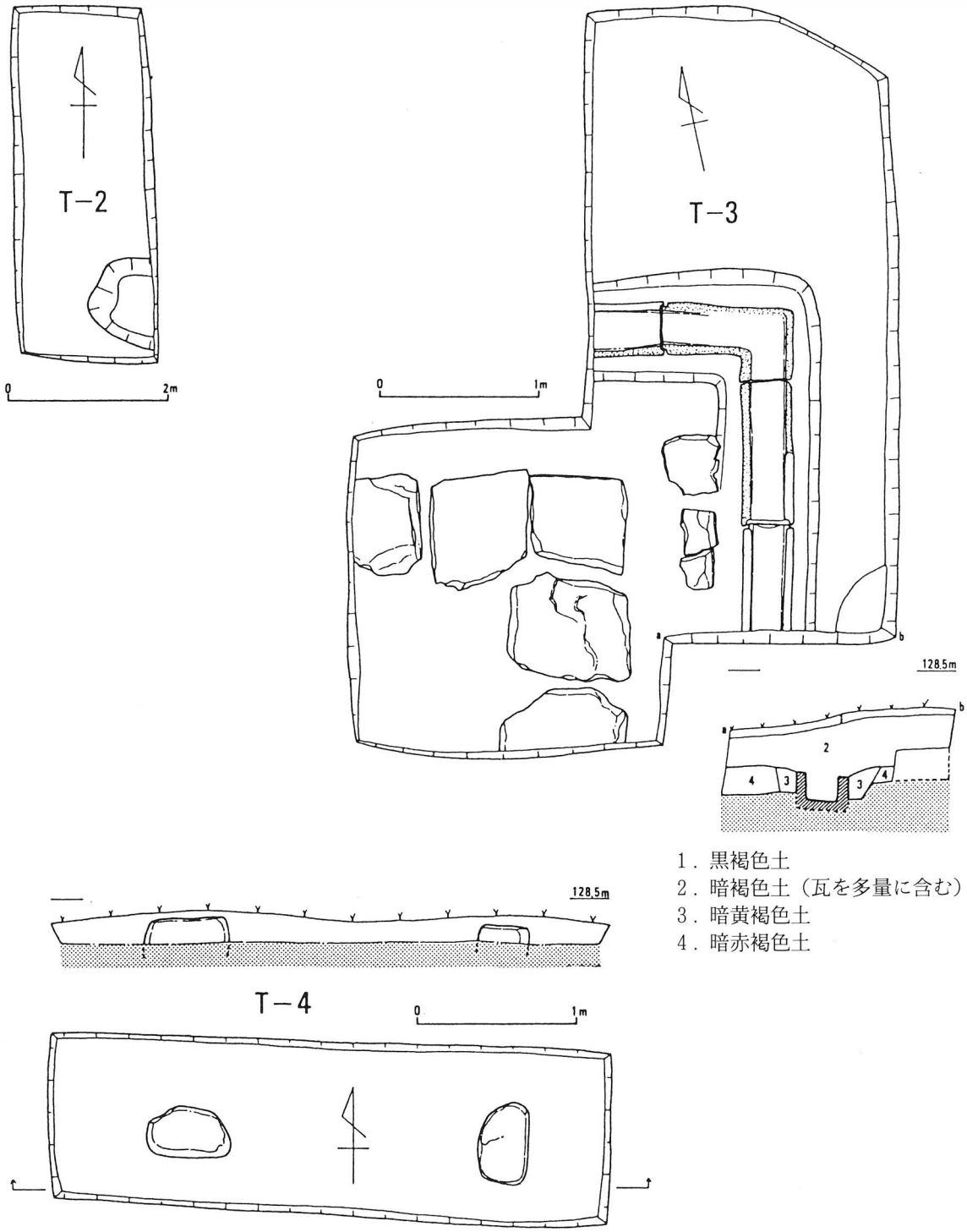


第２図　津山城現況測量図と二の丸トレンチ配置図（Ｓ＝１：500）

1同様、多量の瓦を含んでいた。調査面積は6.5㎡である。

T－3

長柄櫓の北東隅を確認するために設定した。櫓の基礎と考えられる石列と排水溝を検出した。基礎石の大きさは平均70㎝前後で上面は平坦である。各石の上面のレベルはほぼ同一である。石列の端から約70㎝外側には、幅約30㎝の石製の排水溝が基礎石に平行して付設されている。この排水溝は手島石製で、長さ90㎝の規格品を刳り貫いて作っている。接続部は嵌め込み式になるよう、鍵形に加工された精巧なものである。蓋石の存在は明らかではない。蓋がなかったとすれば雨落ち溝の可能性が考えられる。現



第3図　二の丸トレンチ実測図(1)

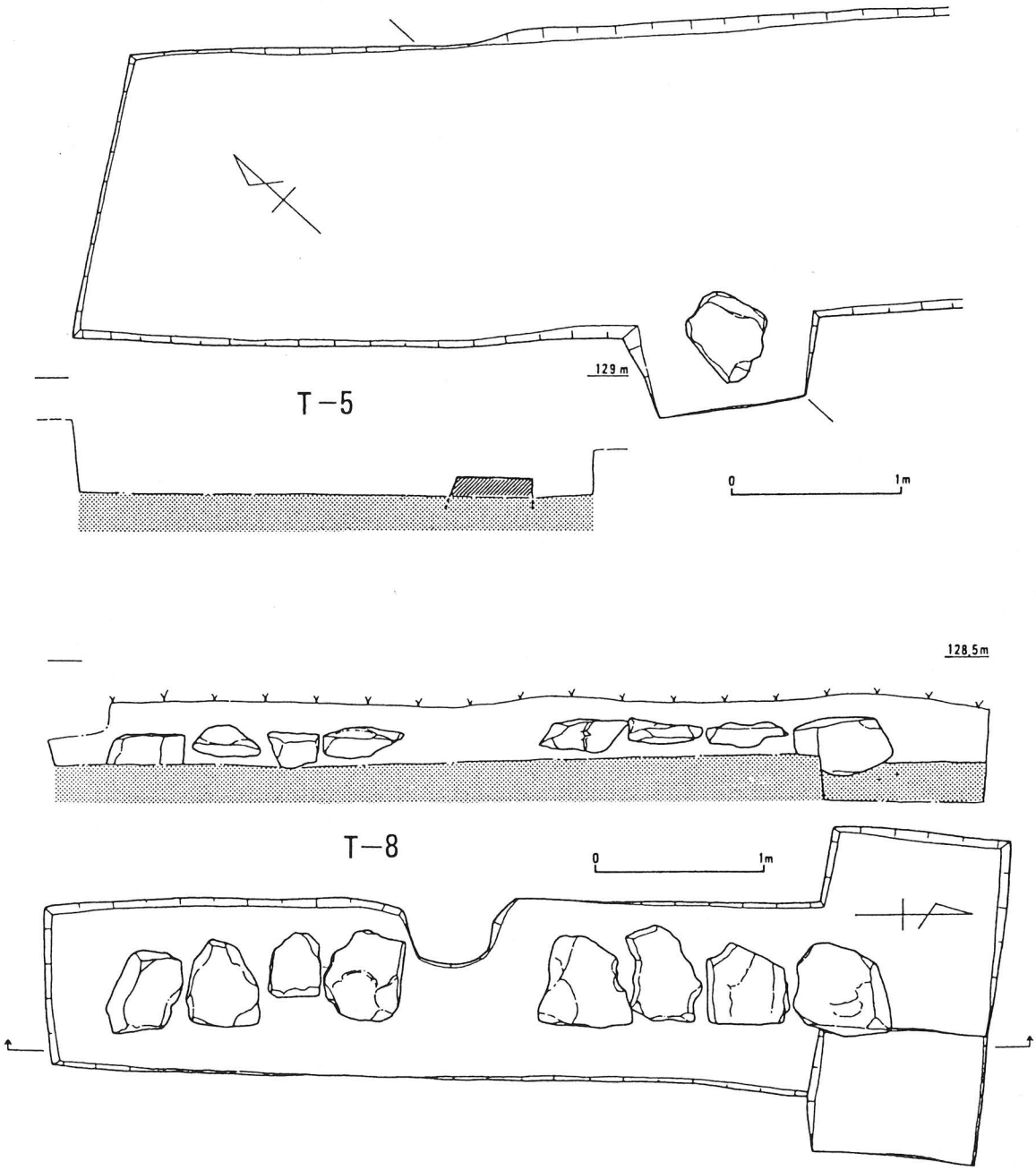
地表面から礎石面までの深さは約25cmを測る。調査面積は10.3㎡である。

T－4

建物の南西隅の礎石を確認するために設定した。西側の礎石の一部が露出していたため、東側方向に対の礎石を求めた結果検出された。石は長さ50cm、幅30cmの河原石で上面は偏平である。それぞれの礎石の心々距離は約２ｍを測る。調査面積は3.2㎡である。

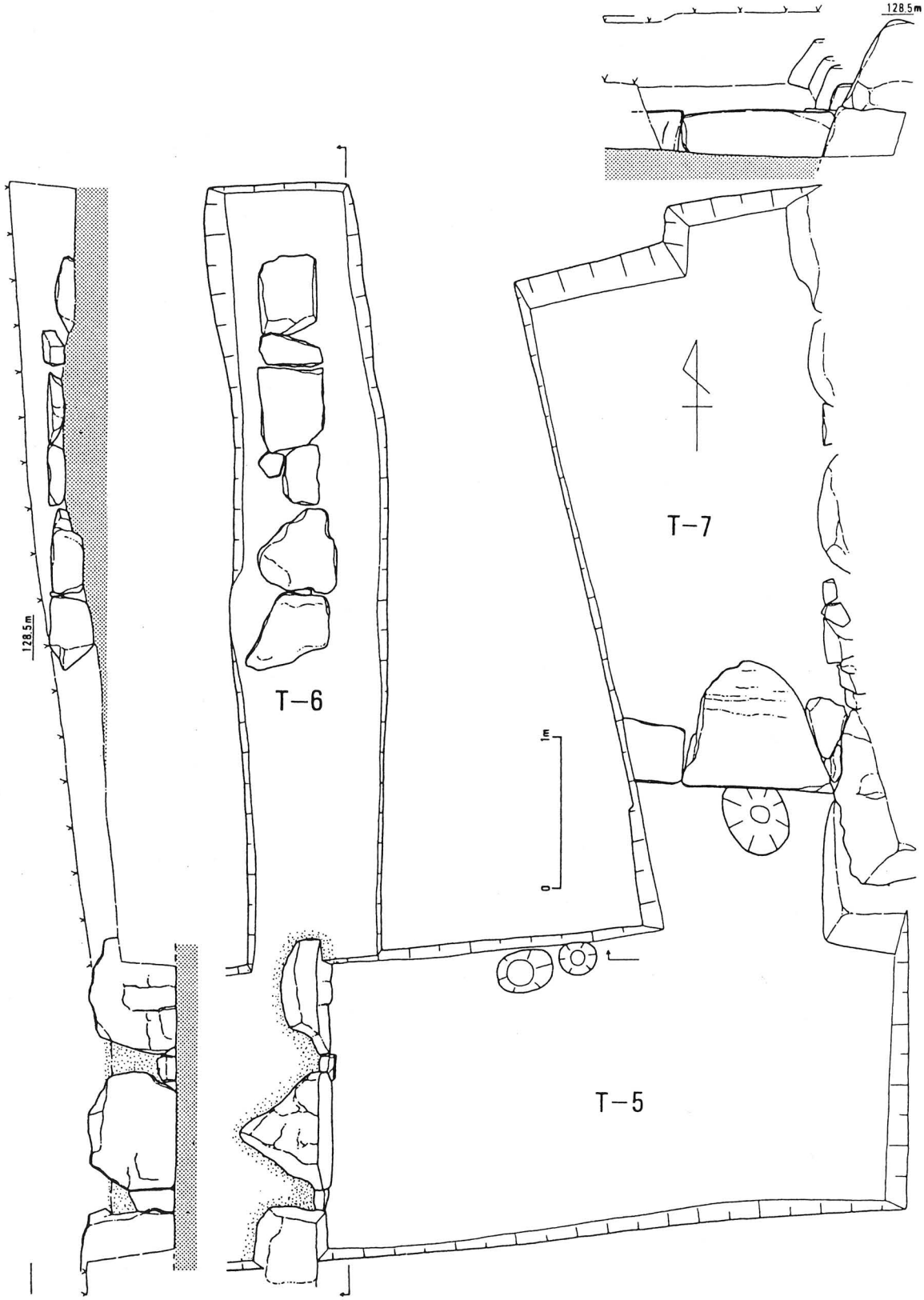
T－5

台所の基礎の石列、及び建物の礎石を確認するために設定した。台所の基礎の石列に相当すると考えられた箇所に一部石が露出していたため、この部分を掘り下げた。果たして、石列は生きていた。この部分は高さ約60cmの石を偏平な面を東に向けて、南北に連ねていた。ちょうど台所の基礎部分にあたり、周辺より一段高く基礎が作られていたことが分かる。そうして見ると、この一体は現状でも一段高くなっ



第４図　二の丸トレンチ実測図(2)

ていることに気付く。石列の東側に柱穴が２カ所検出された。これは建物よりむしろ築造時の足場穴と考えたほうがよさそうである。トレンチの西側では建物の礎石を検出した。大きさは40×50㎝程度で上面が偏平な角礫である。この付近は現地表面から20㎝程の深さで礎石に達する。調査面積は25.3㎡であ



第５図　二の丸トレンチ実測図(3)

る。

Ｔ－６

Ｔ－５で確認された台所の基礎の石列の北端を確認するために設定した。途中一部抜き取られている箇所もあるが、比較的よく残っていた。上面が偏平な石を同一レベルになるように配している。Ｔ－５の基礎より20cm程高い位置にある。調査面積は4.5㎡である。

Ｔ－７

十七番門を確認するために設定した。備中櫓の南西石垣コーナーから北へ１ｍ足らずの所で石段を検出した。石段の高さは30cmを測る。石段の下に深さ50cmの柱穴が位置するが、Ｔ－５同様足場穴と考えられる。調査面積は6.3㎡である。

Ｔ－８

台所の基礎の石列南端を確認するために設定した。トレンチの南側は現在、園路になっており、石列のレベルから見ると一段凹んだ状態になっている。このため石列は遺存しないが、当初はもう少し南へ伸びていたものと考えられる。石は角礫で偏平な面を上に向けレベルを合わすように配置している。現地表面から石の上面までは15cm前後である。調査面積は6.1㎡である。

Ｔ－０

現状では二の丸御殿の南側の石垣が大きく崩壊しており、東西の両端がわずかに築城時の面影を残すだけである。このため石垣の基底部がどれだけ残存しているかを確認するためにトレンチを設定した。石垣の裏込めの円礫の崩壊が激しく最下段までは掘り下げることはできなかったが、石垣の下位は残っていることが確認された。

（２）本丸の調査

Ｔ－１

多門櫓の東端を把握するため設定した。トレンチの東側で南北に走る排水溝を検出した。排水溝は手島石製で断面がＵ字状に刳り貫かれたものを連続してつなぎ合わせている。接続部は鍵形に加工されており、嵌め込み式になっている。個々の長さはまちまちで、北から２番目のものは95cm、３番目のものは110cmである。幅、深さは内面でそれぞれ20cm強を測る。排水溝の東端に沿って角礫３個、西側には長さ75cmの石が置かれていた。これは排水溝の裏込めに使用されたものと考えられる。南のものを除いて、側壁は壊れていた。排水溝より西側は石垣の裏込めの円礫である。調査面積は7.5㎡である。

Ｔ－２

御庭の状況を探るため設定した。しかし、何も検出することができなかった。調査面積は4.6㎡である。

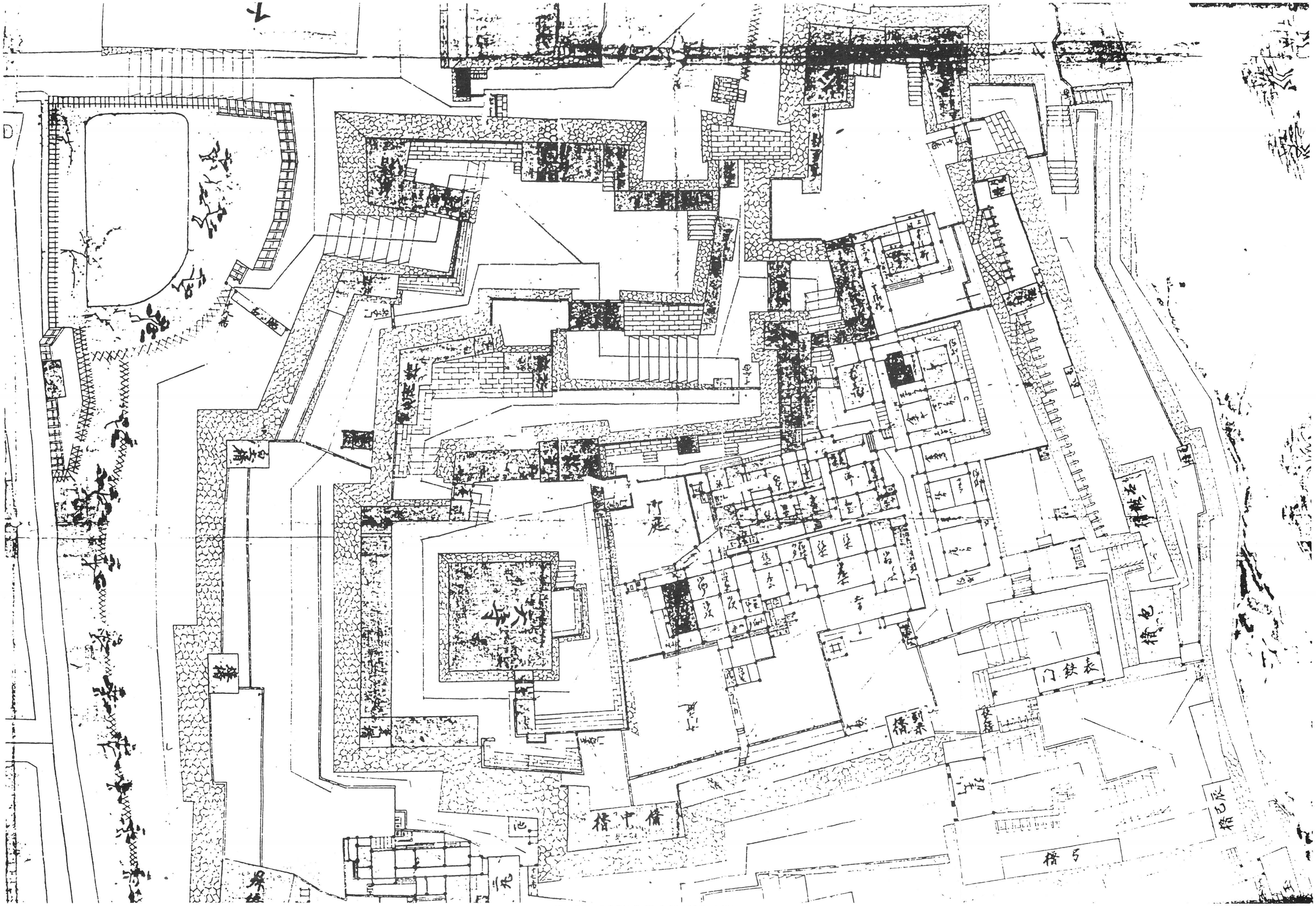
Ｔ－３

南北の多門櫓を結ぶ建物の東端を確認するため設定した。トレンチの東側に石がかかっただけで、他の遺構は検出されなかった。トレンチの西側には石垣の裏込めの円礫が認められた。調査面積は4.4㎡である。

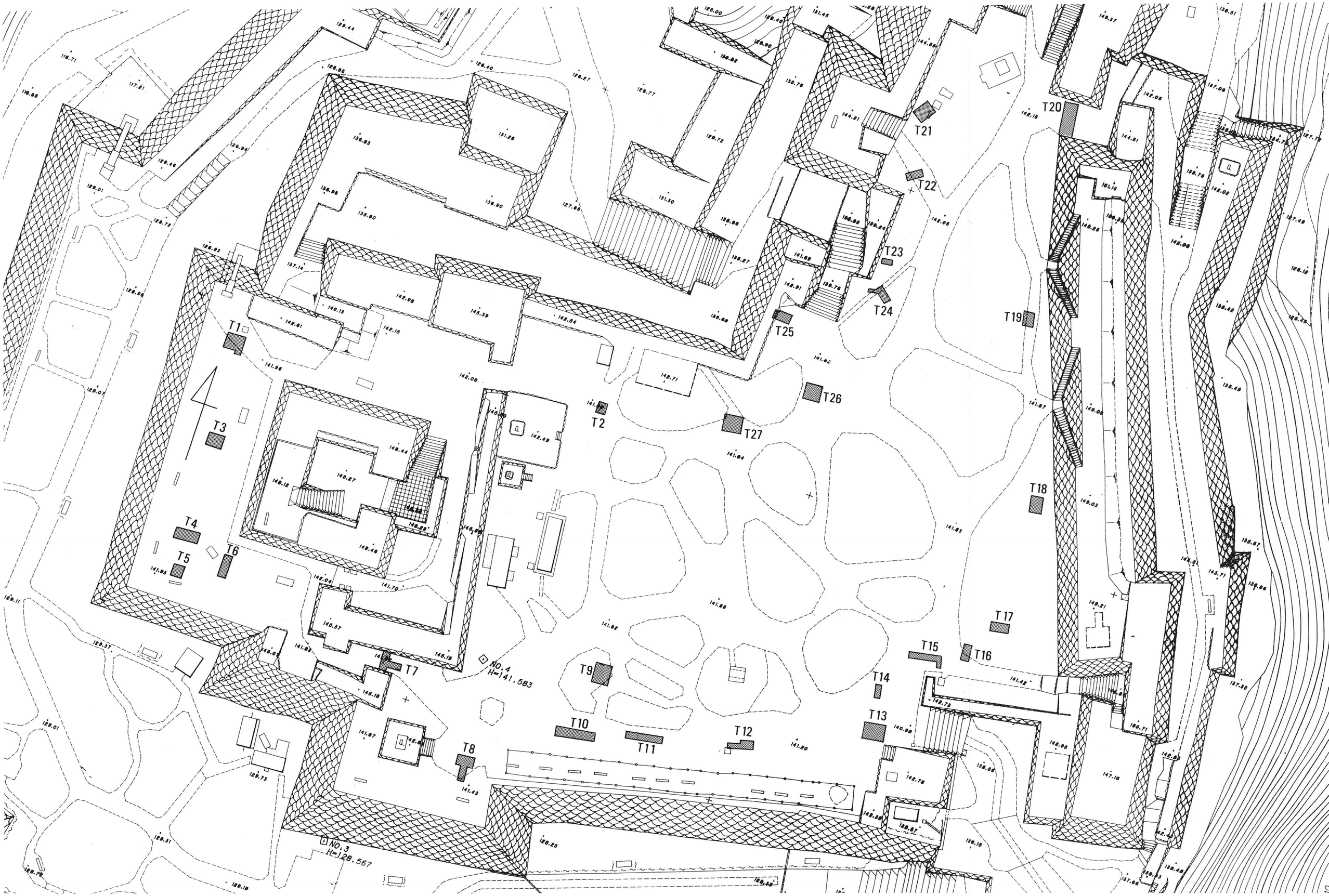
Ｔ－４

南の多門櫓の東端を探るため設定した。遺構を検出することはできなかった。調査面積は1.6㎡である。

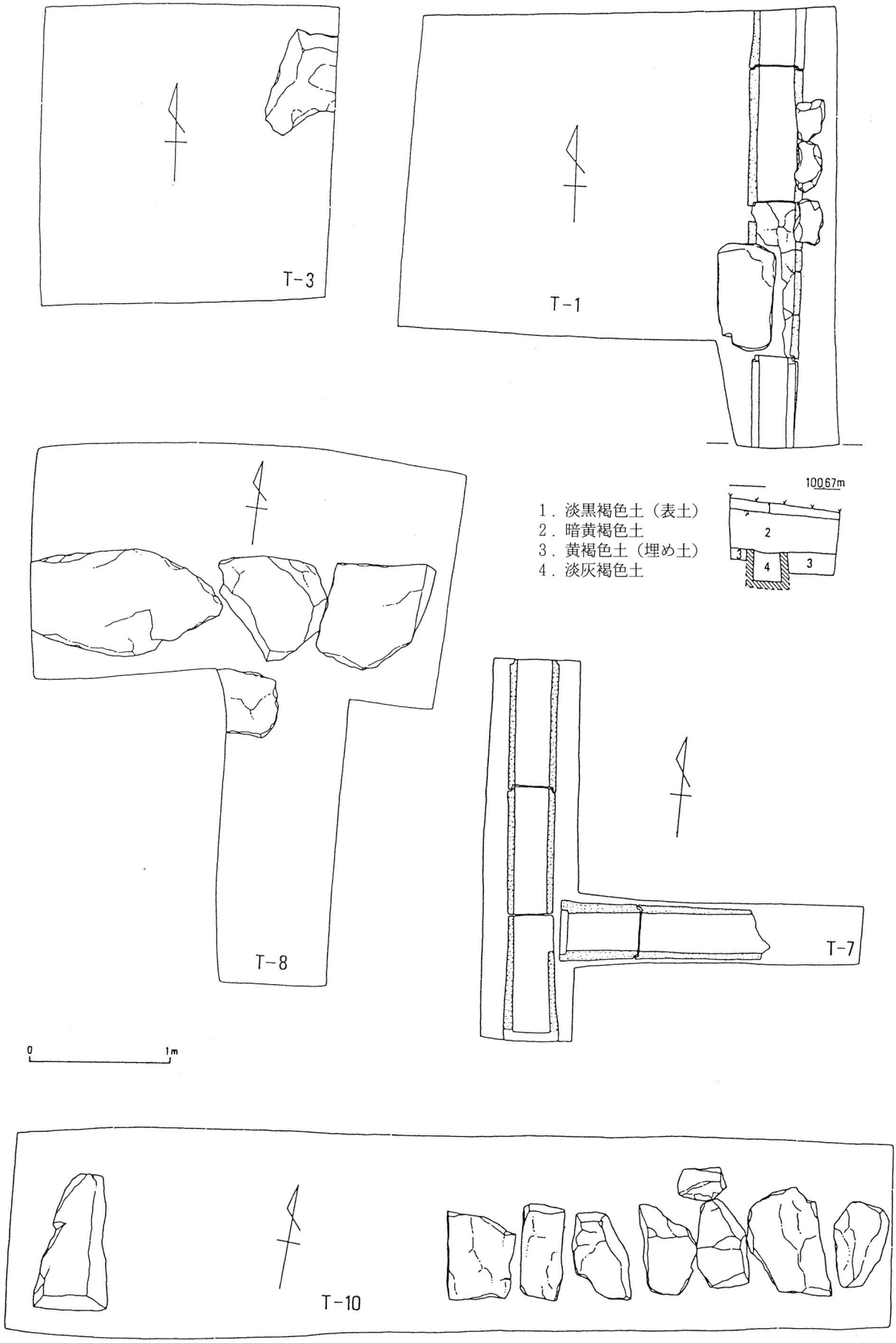
Ｔ－５



第6図　本丸絵図（津山郷土博物館蔵）



第７図　　津山城現況測量図と本丸トレンチ配置図（Ｓ＝１：500）



第８図　本丸トレンチ実測図(1)

南の多門櫓の東端を探るため設定した。石垣の裏込めの円礫が出土するだけで、遺構は確認できなかった。調査面積は2.7㎡である。

T－6

南の多門櫓から東へ伸びる建物の北端を探るため設定した。トレンチの南側で石垣の裏込めの円礫を確認しただけである。調査面積は2.7㎡である。

T－7

五番門の排水溝を調査した。現地表面に手島石の一部が露出していたので、拡張して排水溝の全容を把握した。いずれのU字溝も側壁は失われており、底部が遺存するだけである。南北に3本のU字溝を並べ、北から3本目のものの東側の一部を打ち欠き、この部分から東へ接続している。東方向へは2本分しか残っていないが、当時は長く連なっていたものと考えられる。調査面積は2.5㎡である。

T－8

備中櫓の北端を把握するために設定した。果たして櫓の基礎の石列を検出することができた。検出したのは3個分である。南側の石はレベルが一段低く基礎石になるものではない。3個の石の大きさはまちまちであるが、上面は平らで、北の面は揃っている。石の周辺から漆喰の小さなブロックを検出した。現地表面から10㎝強の深さで石の上面に達する。調査面積は6.6㎡である。

T－9

御庭の状況を探るため設定した。遺構を検出することはできなかった。調査面積は9.3㎡である。

T－10

長局の北側の状況を探るために設定した。その結果、トレンチの東半に7個、西端に1個の計8個の石列を検出した。これらの石はいずれも角張っており、上面が偏平なものはない。石の南側の面は直線上に揃っている。建物の基礎になるものと考えられる。その場合、長局の北端の基礎、本丸の中心建物と長局を画する塀の基礎の2通りが考えられるが、位置関係からして後者の方が可能性が高いように思われる。石の頂部はわずかに現地表面から観察できた。調査面積は8.3㎡である。

T－11

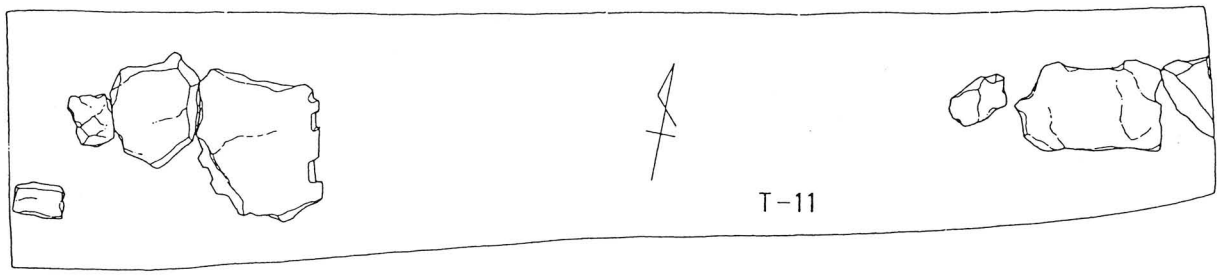
長局の北側の状況を探るために設定した。トレンチの東と西でそれぞれ石を検出したが性格は不明である。調査面積は7.3㎡である。

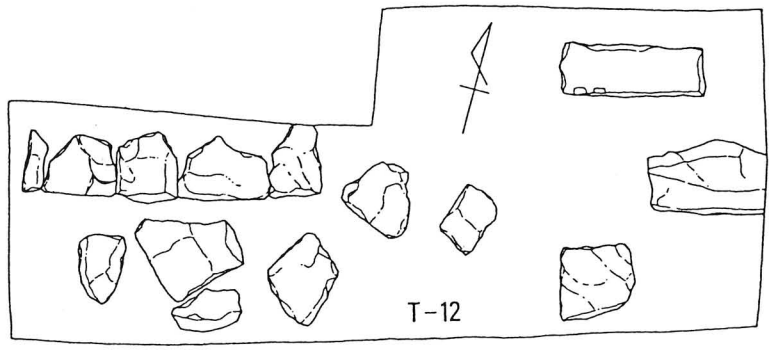
T－12

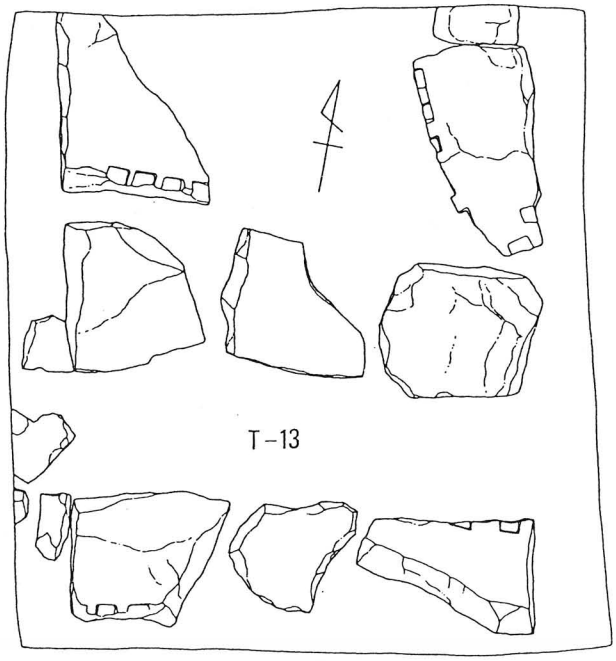
長局の北側の状況を探るために設定した。合計14個の石を検出したが、北西の5個及び東壁に接しているものを除き、他は原位置を止めていないようである。原位置を止めているものは南側の面が直線上に並ぶ。トレンチの西半分には焼土、炭がかなり認められた。これは火災を受けた時のものと考えられる。南西コーナーを深掘りしたが、地山までは達しなかった。従って、この辺りは埋め土で行われていたことが理解される。この石列の性格としてはT－10同様、塀の基礎と考えるのが妥当であろう。調査面積は5.7㎡である。

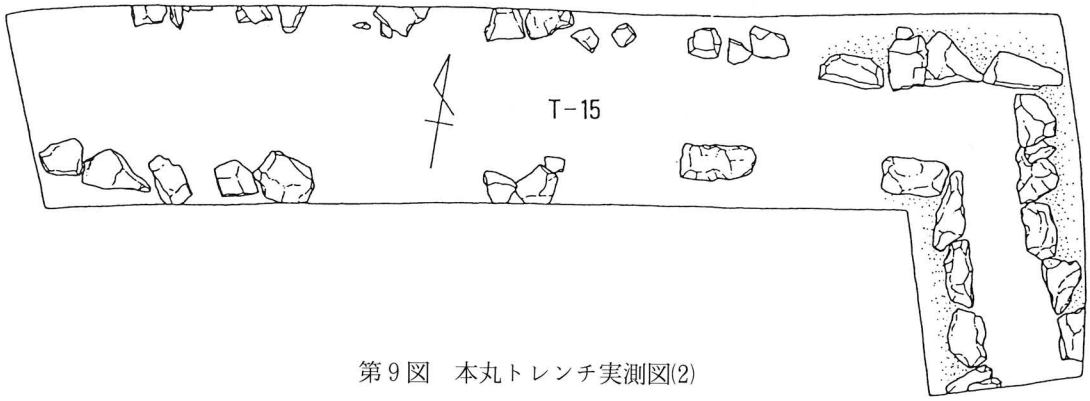
T－13

表鉄門から石段を上がり、本丸に入ったつきあたりの塀の基礎を探るために設定した。70㎝～1m前後の比較的大きめの石が8個出土した。当間隔に並んでいるようにも見えるが、各石の上面は平らでなく、レベルがまちまちであることから基礎の石に相当するものではないと判断された。トレンチの北側中央部には円礫が埋め込まれていた。さらにこの辺りには絵図で見る限り建物配置がないことから、こ









第９図　本丸トレンチ実測図(2)

れらの石も整地する際に埋め込まれたものと考えられる。調査面積は10.7㎡である。

T－14

本丸入り口の北側の塀を確認するために設定した。遺構は何も検出することができなかった。調査面積は4.1㎡である。

T－15

地表面での観察で排水溝の存在が予測されたので、トレンチを入れ確認した。果たして、東西約5m、南北約1.5mにわたり検出することができた。東西方向の溝は南に直角に折れ、表鉄門の北側の石垣に吸収されている。東西溝の両側の石はかなり移動している。残りのよい南北溝で測定すると幅は平均35㎝を測る。調査面積は8.7㎡である。

T－16

建物の礎石を確認するために設定した。何も検出することができなかった。調査面積は4.3㎡である。

T－17

建物の礎石を確認するために設定した。礎石とするには小さいが角礫1点を検出した。調査面積は5.2㎡である。

T－18

便所跡を把握するために設定した。トレンチの北東コーナーで便槽と考えられる深さ約50㎝を測る土壙を検出した。土壙の南側には深さ30～50㎝の非常にしっかりした柱穴がまとまって検出された。さらに西側には偏平な河原石が位置していた。いずれにしてもこれらは便所の建物に関係するものであることには違いない。しかし、礎石立ちか掘立柱かはトレンチの範囲内では明らかにすることはできない。調査面積は5.5㎡である。

T－19

建物の礎石を確認するために設定した。しかし、礎石ではなく深さ約65㎝を測る土壙に当たった。絵図ではこの辺りに土壙を伴うような建物はなく性格は不明である。調査面積は4.2㎡である。

T－20

十一番門の礎石を確認するために設定した。現状では南の月見櫓と北の粟住櫓の間は平坦で何も認められない。しかし、予測に反して礎石ではなく南北両側に、石垣の最下段が検出された。絵図をよく見ると、月見櫓から北に張り出した石垣があり、これに相当するものと考えられる。ではこの張り出し部はいつどうして消滅したのであろうか。崩壊したのであれば周辺に石材が散乱しているのであるがその事実はない。江戸期ならば幕府への届け出の資料があるはずであるが、その資料は見当たらない。従って、明治以降のある時期に別の場所に転用されたと考えるのが妥当であろう。今となっては検証するすべはないが。調査面積は16.4㎡である。

T－21

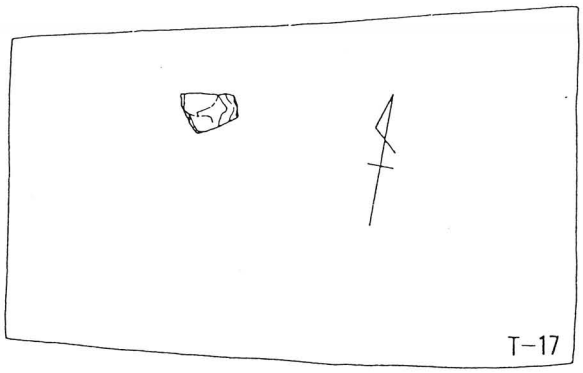
遺構がないことを確認するために設定した。調査面積は5.3㎡である。

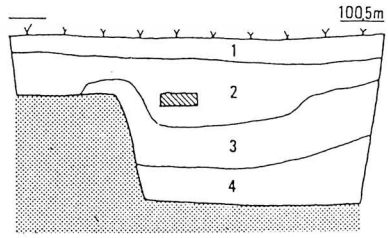
T－22

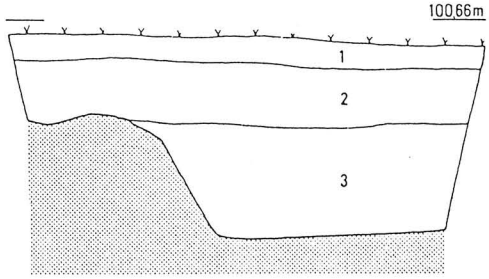
遺構がないことを確認するために設定した。かなり攪乱を受けており、コンクリート塊等も散乱していた。調査面積は4.6㎡である。

T－23

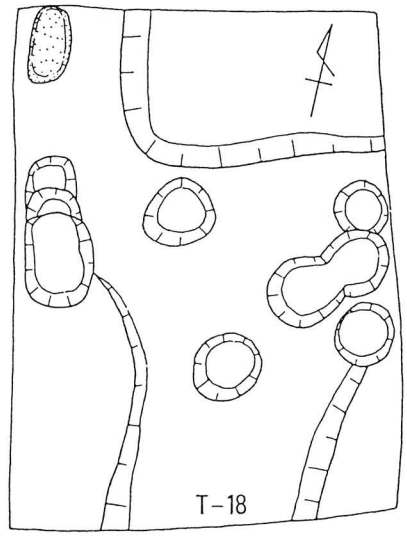
この場所は埋門の東側にあたり絵図では南北棟が位置する。この南北棟の東端を探るために設定した。



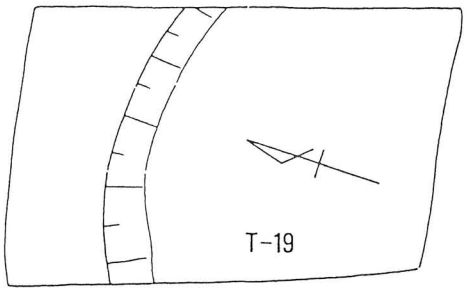


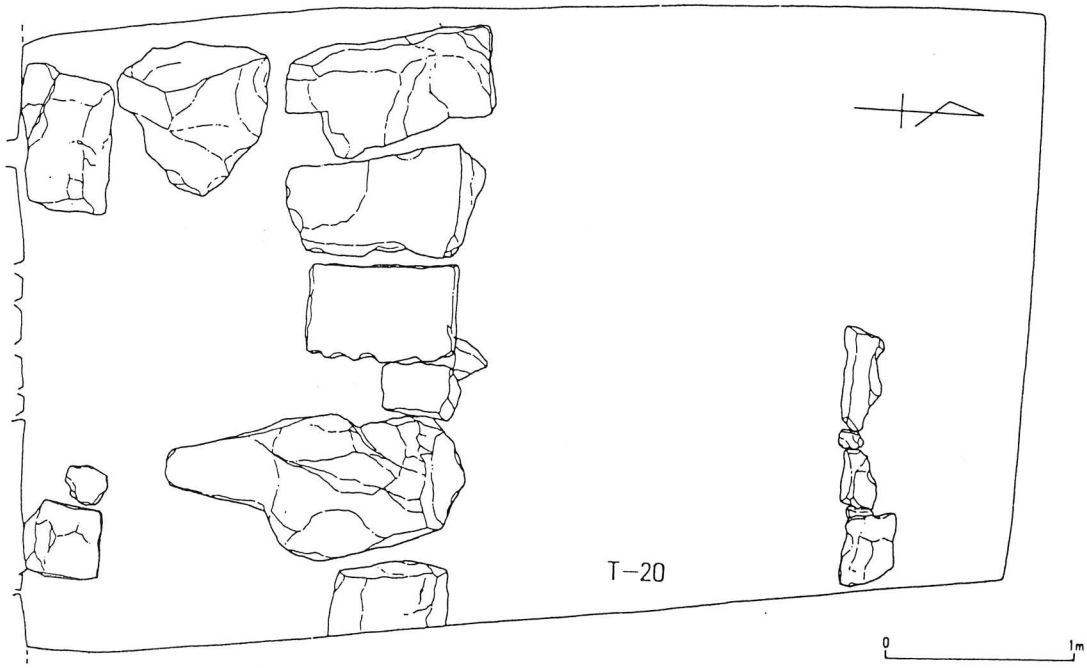


1．淡黒褐色土（表土）
2．暗黄褐色土
3．黄褐色土



1．淡黒褐色土（表土）
2．暗黄褐色土
3．黄褐色土
4．黄褐色土（地山ブロックを含む）





第10図　本丸トレンチ実測図(3)

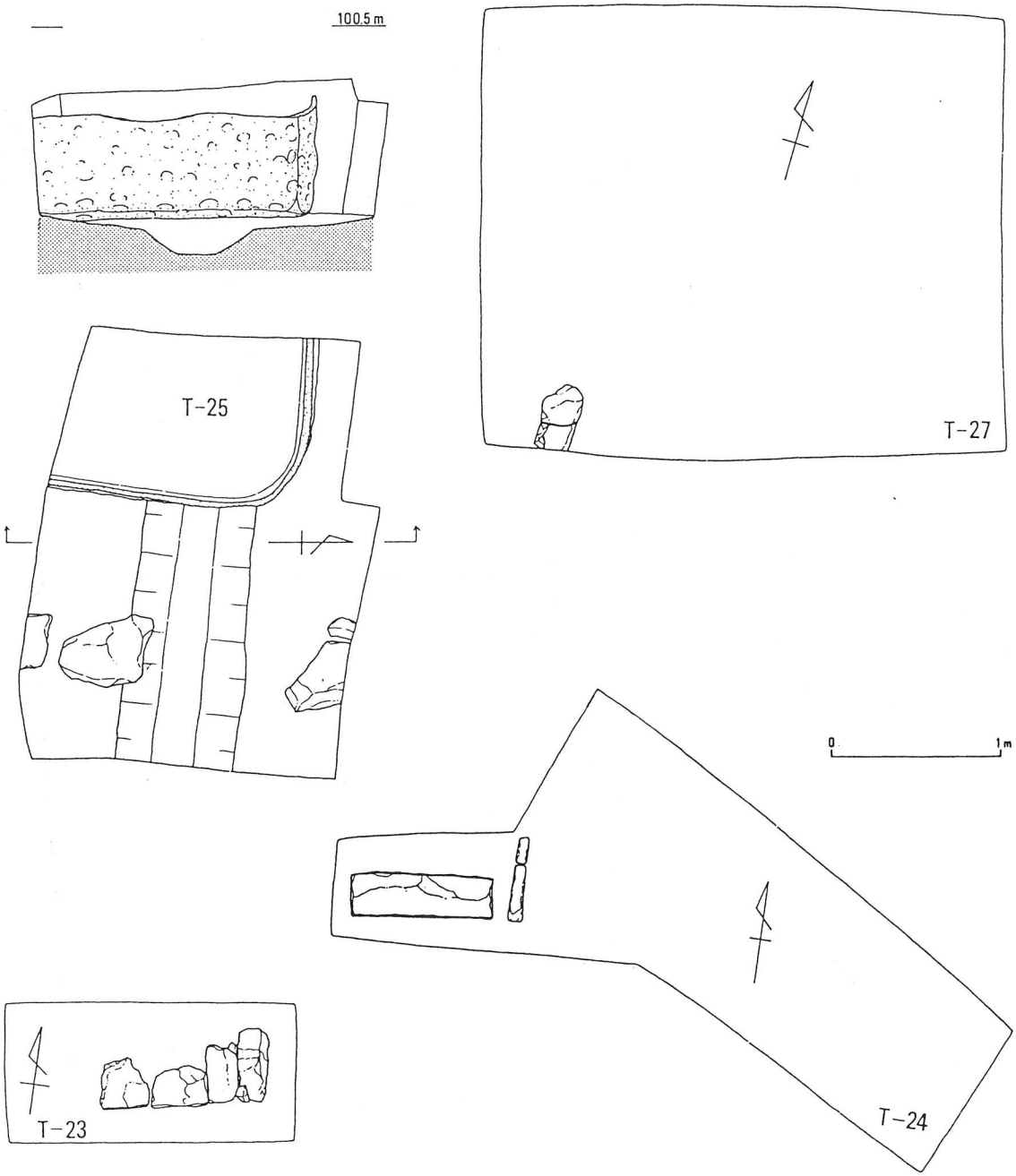
東西方向に並ぶ30㎝大の４個からなる石列を検出した。石列は南側の面が揃っている。建物は南北方向で石列は東西方向という関係は理解できない。絵図に記載のない別の建物があったか、火災の前後で建物配置に多少の変化があったのかも知れない。調査面積は1.4㎡である。

Ｔ－24

建物の礎石を確認するために設定した。トレンチの西コーナーで幅７㎝の板状の石が確認されたので、西側に拡張した。この結果、板状の石は南にもう１枚連なっていた。さらに、この石から10㎝の間隔をおいて西方向に幅25㎝、長さ85㎝の角柱状の石が検出された。性格は不明である。調査面積は4.4㎡である。

Ｔ－25

七軒廊下の基礎を確認するために設定した。浅い東西方向の溝の上に、陶棺状を呈した土製品を検出



第11図　本丸トレンチ実測図(4)

した。真砂土のタタキ仕上げによるものである。内面は滑らかに仕上げられているのに対し、外面はタタキによる凹凸が激しくざらついている。器壁の厚さは平均3㎝前後で非常に薄い。この土製品の上位は欠損しているが、現存部で深さ70㎝を測る。幅、長さはトレンチ外にかかるため不明である。用途は不明である。溝を挟んで南北に石が検出されたが、いずれも床面から10～20㎝程度浮いていた。調査面積は5.1㎡である。

T－26

建物の礎石を確認するために設定した。何も検出することはできなかった。調査面積は7㎡である。

T－27

建物の礎石を確認するために設定した。トレンチの南西部において小さな石1点を検出したが、礎石になるものではない。調査面積は7.8㎡である。　（行田裕美）

4．遺物の概要

今回紹介するのは主として軒丸瓦・軒平瓦であり、その他若干の陶磁器・土師器・焼塩壺が出土しているが、これらについては図版に示すに止めておく。以下に示す本丸の軒丸瓦・軒平瓦は本丸北西隅の7番門の跡に建てられていた民家（山岡宅）を撤去した際に、その造成土中から採集したものである。また二の丸の遺物については調査の際に出土したものである。

以下その概要を示す。軒丸瓦はすべて三ツ巴文であり、一方軒平瓦は均整唐草文の他にいくつかのバリエーションが認められる。

（1）本丸の軒瓦（第12～13図・表1・2）

a．軒丸瓦

本丸の軒丸瓦は19種認められる。大きさによりおおむね三つのグループに分けることができる。1～4は大型の（210～194㎜）もの、5～7は中型の（194～176㎜）もの、8～18はやや小型の（156～130㎜）ものである。巴の方向は中型のものと小型の8が右回りの他は左回りである。この大きさの違いはこれらの瓦が用いられた建物の違いを示していると考えられる。また前述したような理由で層位的に新旧の決定ができない。それ故基本的には巴の頭が小さく尾が長く伸び、珠文が小さく多いものを古く、巴の頭が大きく尾が短く珠文が大きく少ないものを新しく位置づけるならば、2・3・4・10・12・15・16が古い一群で5・6・7・8・11・13・18が中間の一群、1・9・14・17が新しい一群にと3時期に分類できよう。ただし、それらの年代的な位置付けについてはここでは触れることができない。今後の本格的な調査を待ちたい。

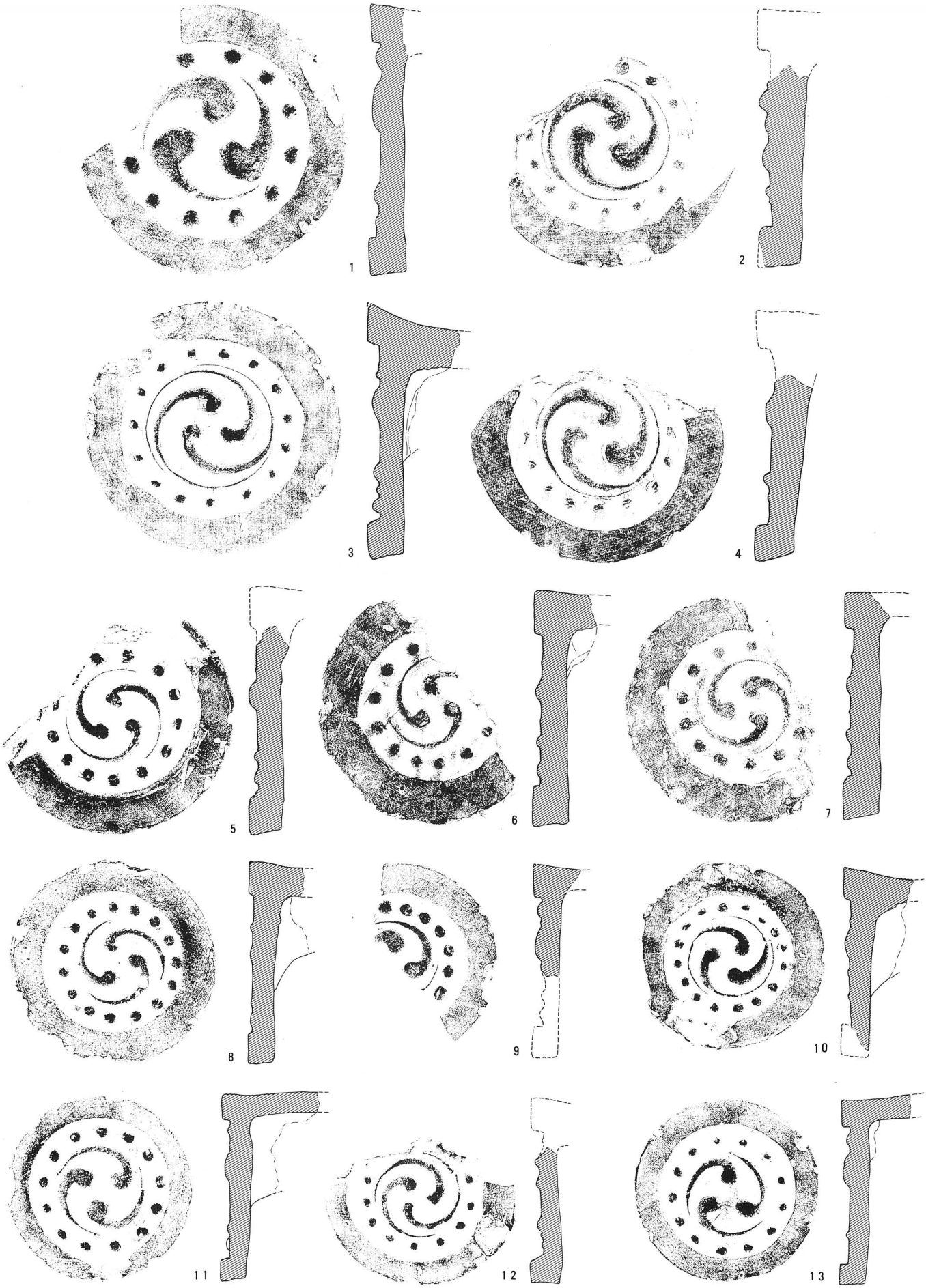
b．軒平瓦

軒平瓦は7種認められる。4を除きいずれも均整唐草文を基本とする。1は中央に桐の葉を配し、その両側に唐草文が伸びている。これは他のものよりも圧倒的に大きく、おそらく1～4の大型の軒丸瓦に伴うものであろう。胎土・焼成は軒丸瓦3・4に酷似する。このセット関係は後述する二の丸においては認められず本丸で最も大規模な建物、恐らくは天守ないしは本丸御殿の所用瓦と考えられる。その他の軒平瓦については軒丸瓦とのセット関係は不明であり、また各々の軒平瓦の先後関係・時期についても明らかではない。

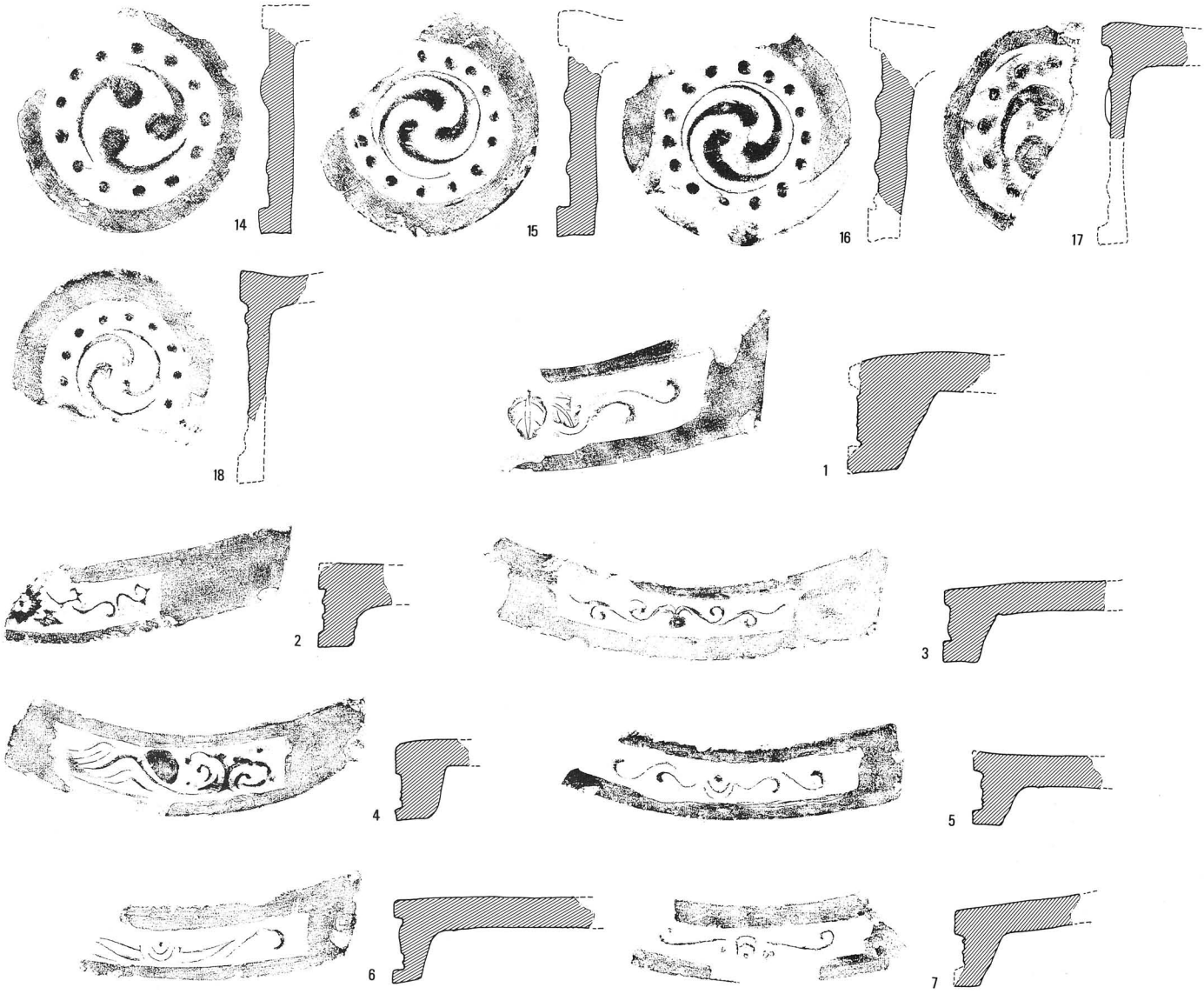
（2）二の丸の軒瓦（第14～16図・表3・4）

a．軒丸瓦

二の丸の軒丸瓦はおおよそ32種類認められる。直径は162㎜～128㎜で、破片が多いこともあり本丸の



第12図　本丸軒瓦(1)



第13図　本丸軒瓦(2)

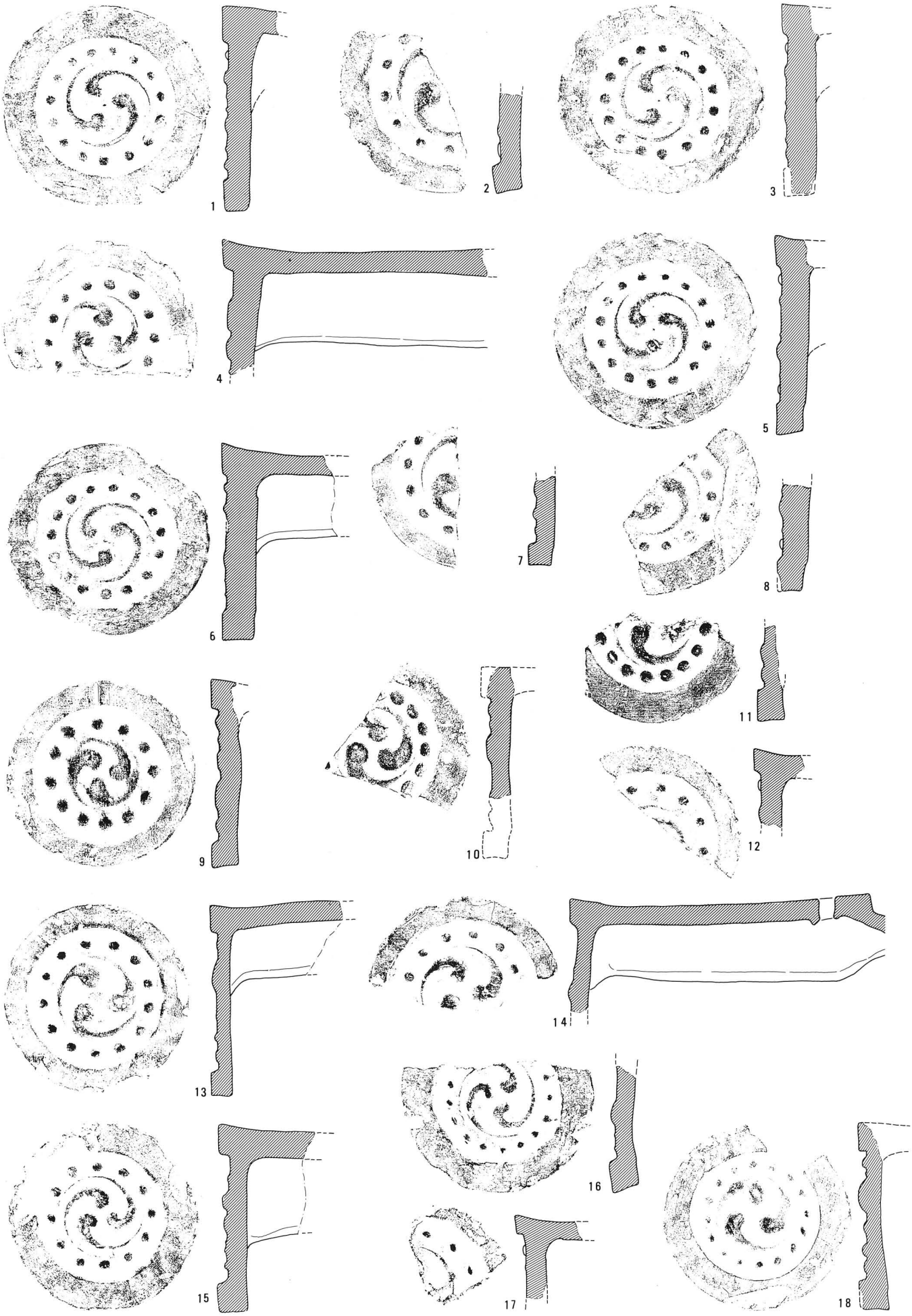
ように明確には大きさによってはグループ分けできない。巴の方向は１・３・５・６・８・12・43が右回りであり、その他は左回りである。本丸の項で述べた新旧の位置付けに従うならば、あまり顕著ではないが19・38などが比較的古相に、10・11などが比較的新相に位置付けられようか。また、図中１・３・５・６は同笵であり、さらにこれらは本丸の８とも同笵である。さらに10・11は同笵で、本丸の９と同笵、14・22が同笵で本丸の14とも同笵、27・29・30・31・40が同笵、40・42が同笵である。本丸同様、それぞれ個々の年代等は不明である。

ｂ．軒平瓦

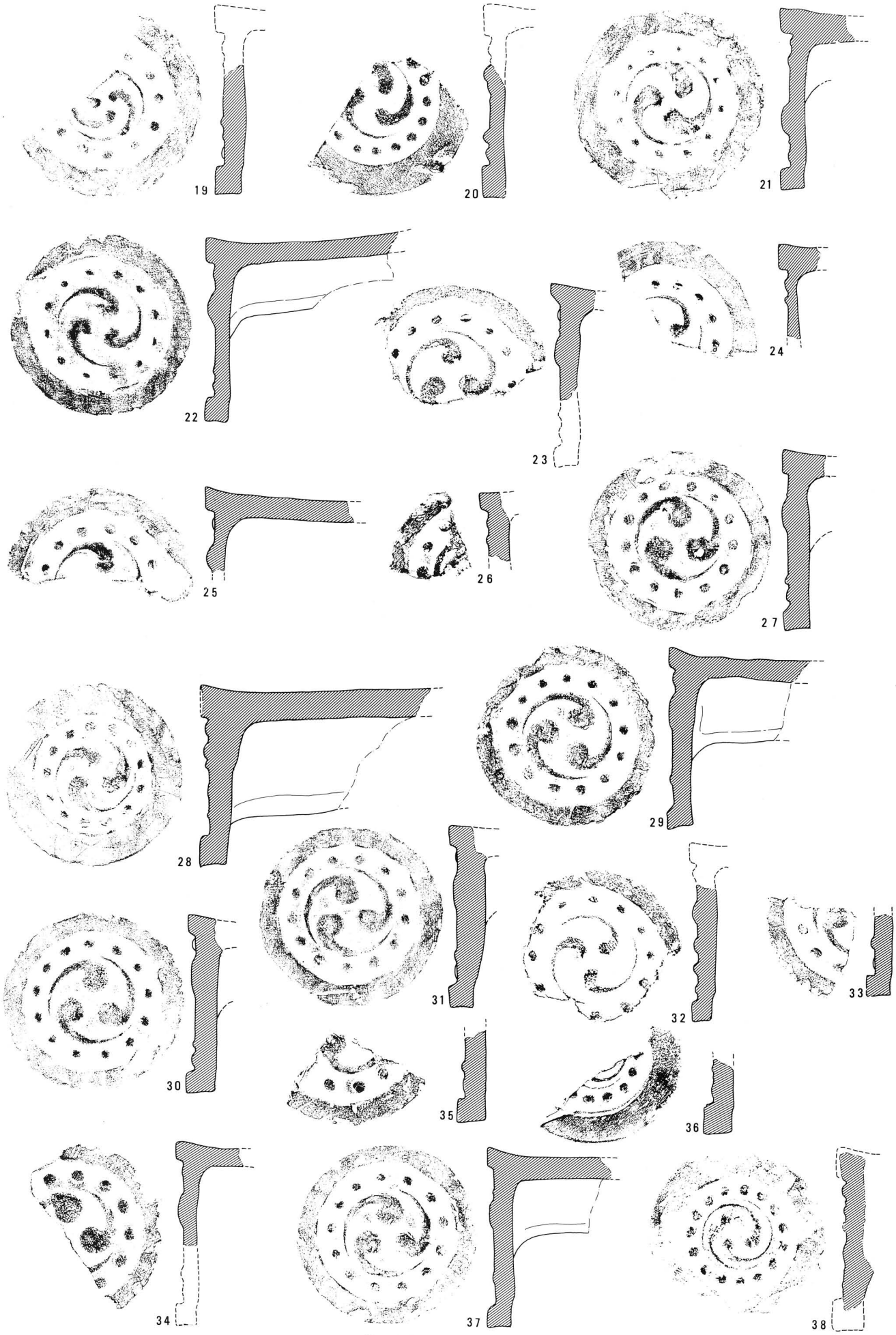
軒平瓦は10種類認められる。いずれも基本的には均整唐草文を基本としており、中心飾りに様々なバリエーションが認められる。また１・２は同笵であろう。８の中心飾りは左回りの三ツ巴文であり、９の中心飾りは本丸の１の軒平瓦に認められる桐が退化したものと考えられる。これらと軒丸瓦とのセット関係は不明である。

（３）まとめ

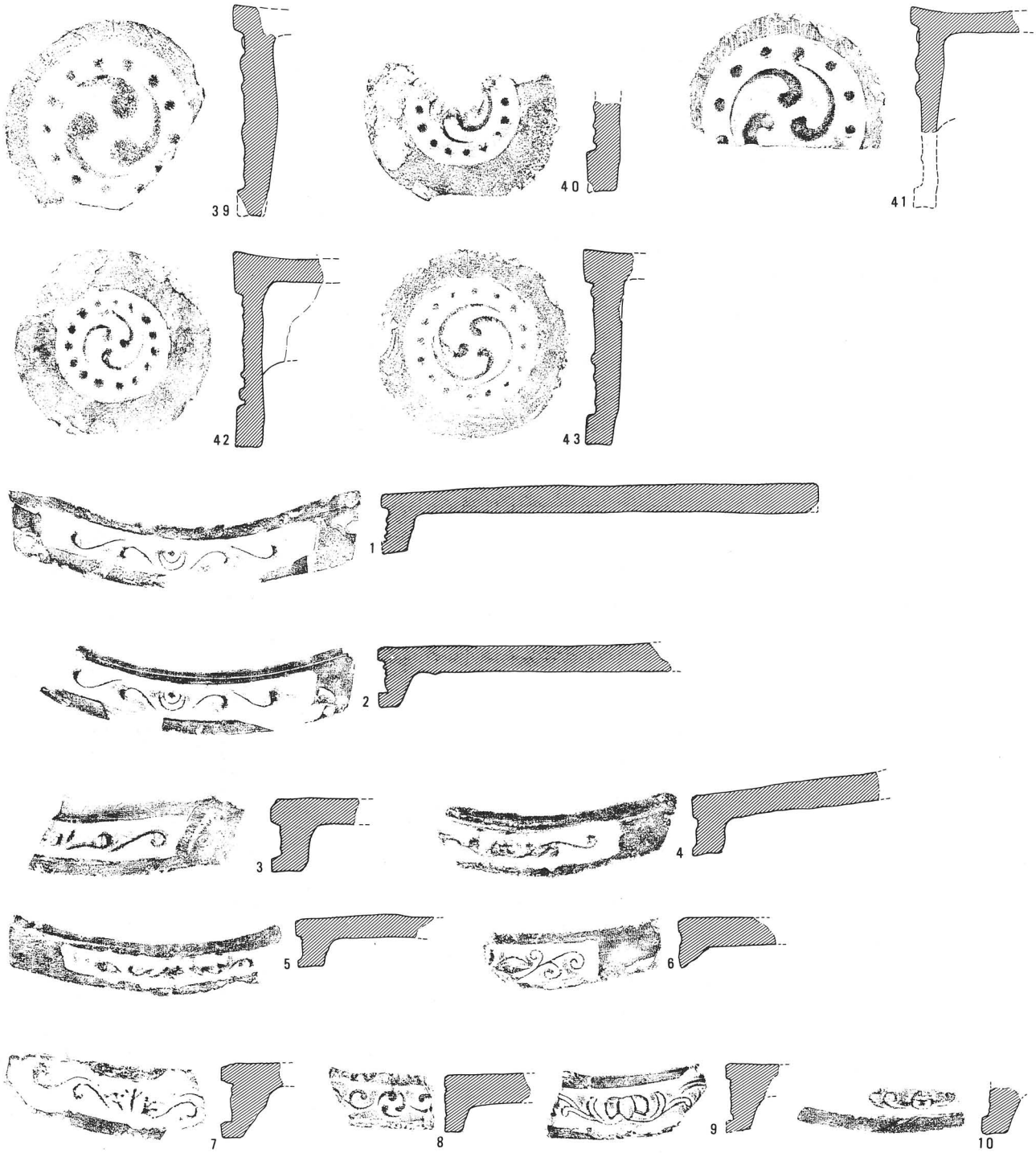
以上、出土瓦について簡単に説明を加えた。現在の知見を提示してまとめとする。①軒瓦については



第14図　二の丸軒瓦(1)



第15図　二の丸軒瓦(2)

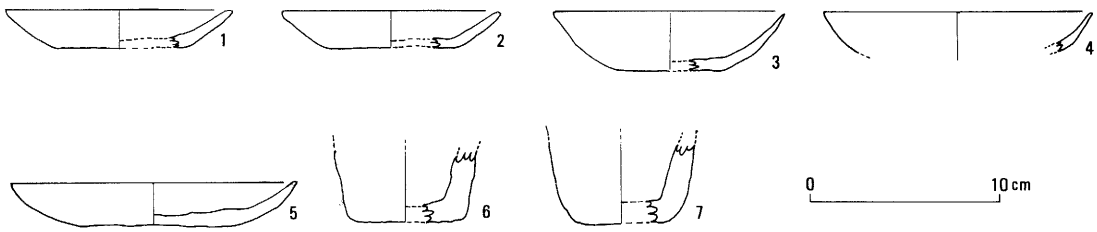


第16図　二の丸軒瓦(3)

総じて本丸の方が二の丸よりも大きな瓦を使用している。本丸内の建物規模が二の丸の建物規模よりも大きかったことを示していよう。②特に軒丸瓦の笵の数が多いことである。数時期に分類できるため差し替えも当然あろうが、これが建物毎に笵が使い分けられていたのか、軒瓦の製作を急いだために数多くの笵を使用したのか、今後の調査の成果に待ちたい。　（平岡正宏）

5．おわりに

今回、津山城に最初の発掘調査のメスが入ったわけであるが、極めて遺構の遺存状態が良好であることがわかった。さらに、絵図の記載もかなり信憑性が高いものであることが証明された。一方で排水溝、T－25の土製品等絵図に記載のない遺構もかなり存在することが明らかになった。今回は地下埋設溝の



第17図　二の丸出土土器類

表1　本丸軒丸瓦観察表

番号	瓦当径	巴 径	巴 巴	珠文 数	珠文 径	周縁 幅	周縁 高さ	瓦当厚さ	備考
1	210	106	左	(12)	17	30	8	19	
2	(200)	100	〃	(16)	12	31	10	28	
3	198	101	〃	15	11.5	28	10	18	
4	194	99	〃	(15)	12	28	11	25	
5	191	74	右	(13)	11	29	8	19	
6	181	70	〃	(13)	12	31	7	20	
7	176	71	〃	(13)	12.5	28	7	28	
8	156	70	〃	15	10	22	4	17	
9	(150)	—	左	—	13	24	7	14	
10	(146)	66	〃	16	10	22	6	17	
11	144	71	〃	13	10	19	7	16	
12	(144)	66	〃	(14)	8	17	10	14	
13	142	67	〃	13	11	20	7	15	
14	138	69	〃	13	11.5	15	6	15	
15	138	66	〃	15	10.5	18	8	15	
16	(136)	69	〃	15	9.5	19	8	17	
17	(134)	—	〃	—	11.5	11	7	8	
18	130	55	〃	(13)	7	18	5	9	

表2　本丸軒平瓦観察表

番号	瓦当幅	瓦当高	外区 左幅	外区 右幅	外区 上幅	外区 下幅	外区 高さ	文様区 幅	文様区 高さ	瓦当厚さ	備考
1	(290)	65	—	36	10	15	9	—	40	55	中心桐
2	(320)	47	—	72	13	7	5	—	28	27	
3	(248)	44	—	52	8	14	5	143	22	32	宝珠唐草文
4	(230)	49	—	47	8	9	8	139	32	28	山月波
5	(221)	44	—	27	11	10	7	168	23	29	
6	(220)	43	—	26	15	7	5	—	21	31	
7	—	45	—	—	14	10	7	—	21	34	

表3　二の丸軒丸瓦観察表

番号	瓦当径	巴 径	巴 巴	珠文 数	珠文 径	周縁 幅	周縁 高さ	瓦当厚さ	備考
1	162	71	右	15	10	26	4	20	
2	(162)	—	左	(12)	11	23	7	15	
3	160	65	右	15	9	22	3	22	
4	158	64	左	(13)	12	21	8	18	
5	155	70	右	15	9	25	3	21	
6	154	69	〃	15	10	23	3	21	
7	(154)	—	左	(12)	11	17	6	14	
8	(152)	—	右	(14)	11	24	3	23	
9	150	59	左	12	13	20	5	16	
10	150	65	〃	(16)	14	23	5	13	
11	(150)	—	〃	(16)	13	24	5.5	13	
12	(150)	—	右	—	9	18	6	16	
13	149	68	左	13	11.5	21	6	11	
14	148	69	〃	(13)	11	18	8	12	
15	148	66	〃	12	11	25	9	18	
16	148	62	〃	(17)	8	23	6	16	
17	(148)	—	〃	—	9	15	5	14	
18	147	65	〃	16	12	24	5.5	10	
19	146	71	〃	(12)	10	22	6	17	
20	(146)	62	〃	(16)	13	23	6	11	
21	144	70	〃	12	8	19	10	16	
22	144	67	〃	12	10.5	17	7	10	
23	(144)	71	〃	(12)	10	16	6	15.5	
24	(144)	—	〃	(12)	11	19	6	11	
25	(142)	—	〃	(12)	11	16	7	11	
26	(142)	—	〃	—	8	16	5.5	14	
27	141	70	〃	13	11	15	7	16	
28	140	64	〃	13	12	24	8	17	
29	140	72	〃	13	11	15	6	13	
30	140	73	〃	13	9	16	6	16	
31	140	70	〃〃	13	10	18	5	23	
32	(140)	74	〃	(12)	10	15	4	16	
33	(140)	—	〃	—	11.5	16	6	14.5	
34	(140)	74	〃	(12)	12	16	5	13	
35	(140)	—	〃	(12)	12	18.5	5	16	
36	(140)	—	〃	—	11	24.5	6	16	
37	139	73	〃	13	10	15	6	14	
38	136	57	〃	15	10	24	7	11	
39	136	70	〃	13	12	16	5.5	20	
40	(134)	—	〃	16	8	28	6	16	
41	132	73	〃	(12)	11	12	5	12	
42	128	47	〃	15	8.5	27	5	11	
43	128	54	右	16	8	19	5	16	

表4　二の丸軒平瓦観察表

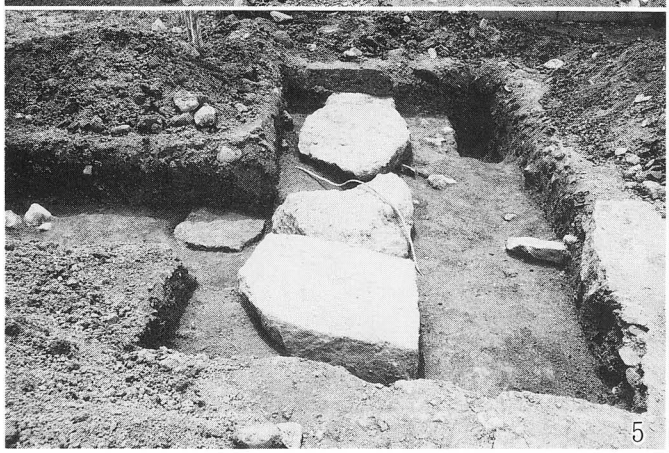
番号	瓦当幅	瓦当高	外区 左幅	外区 右幅	外区 上幅	外区 下幅	外区 高さ	文様区 幅	文様区 高さ	瓦当厚さ	備考
1	226	41	19	27	8	9	6	180	24	26	
2	(234)	39	—	24	7	9	7	—	23	26	
3	(240)	46	—	36	13	9	5	—	24	28	
4	(220)	40	—	33	15	5	4	—	20	22	
5	(220)	33	36	—	10	6	4	—	17	26	
6	(228)	40	—	47	8	5	4	—	27	24	
7	—	45	—	—	10	10	7	—	25	36	
8	—	36	—	—	8	5	2	—	23	19	中心三ツ巴
9	—	43	—	—	9	7	3	—	27	20	中心桐?
10	—	—	—	—	—	10	4	—	—	(26)	

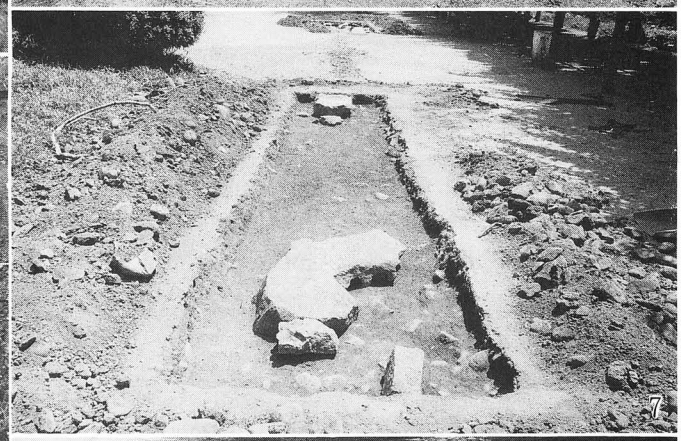
ルートを決定するための調査で非常に限定された場所での調査であったが、かなりの成果を上げることができた。今後、具体的な整備に当たっては詳細な調査が必要であることは言うまでもないが、その暁には、文献からだけの知見しかない現在の津山城研究に多大の貢献をすることは間違いあるまい。

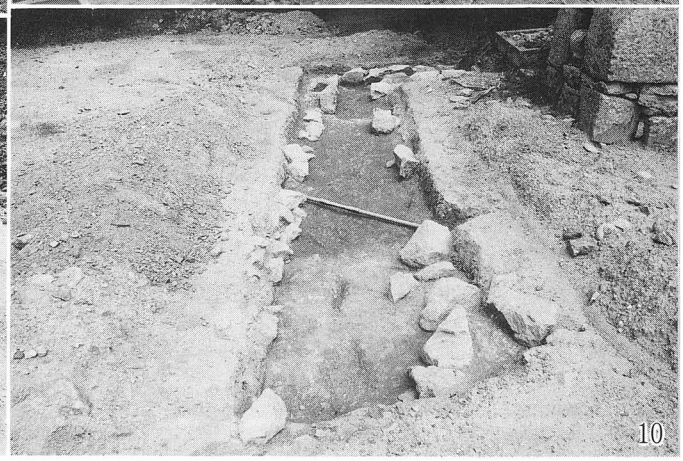
最後になったが、津山郷土博物館の神尾　斉、尾島　治氏に種々御教示いただいた。記して感謝申し上げる次第である。

（行田裕美）

図版１　二の丸調査　1.T－３（東から）　3.T－４（西から）　5.T－５（東から）　7.T－７（南から）　9.T－０（南から）
2.T－３（南から）　4.T－５（東から）　6.T－６（北から）　8.T－８（北から）





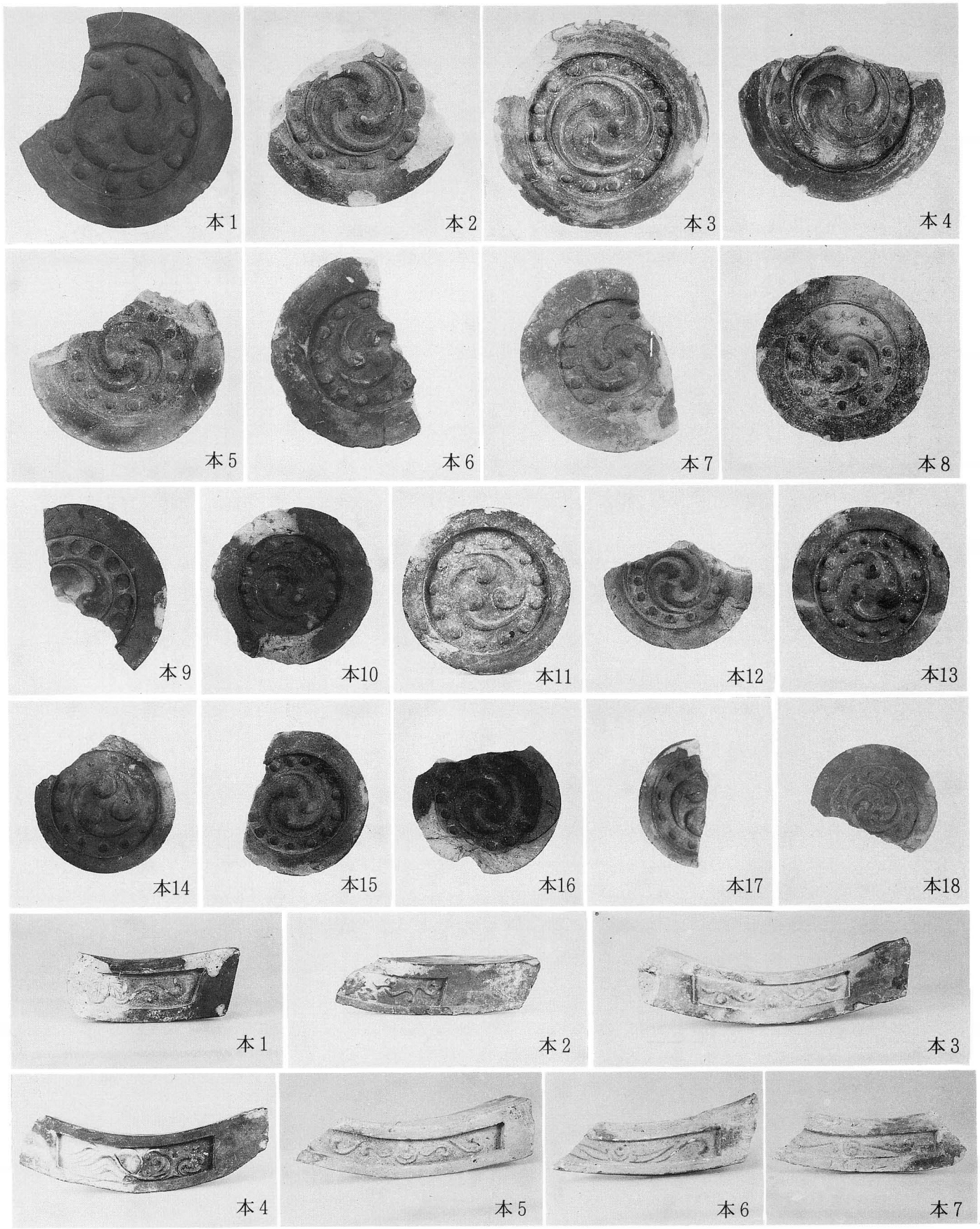


図版 2　　本丸の調査(1)

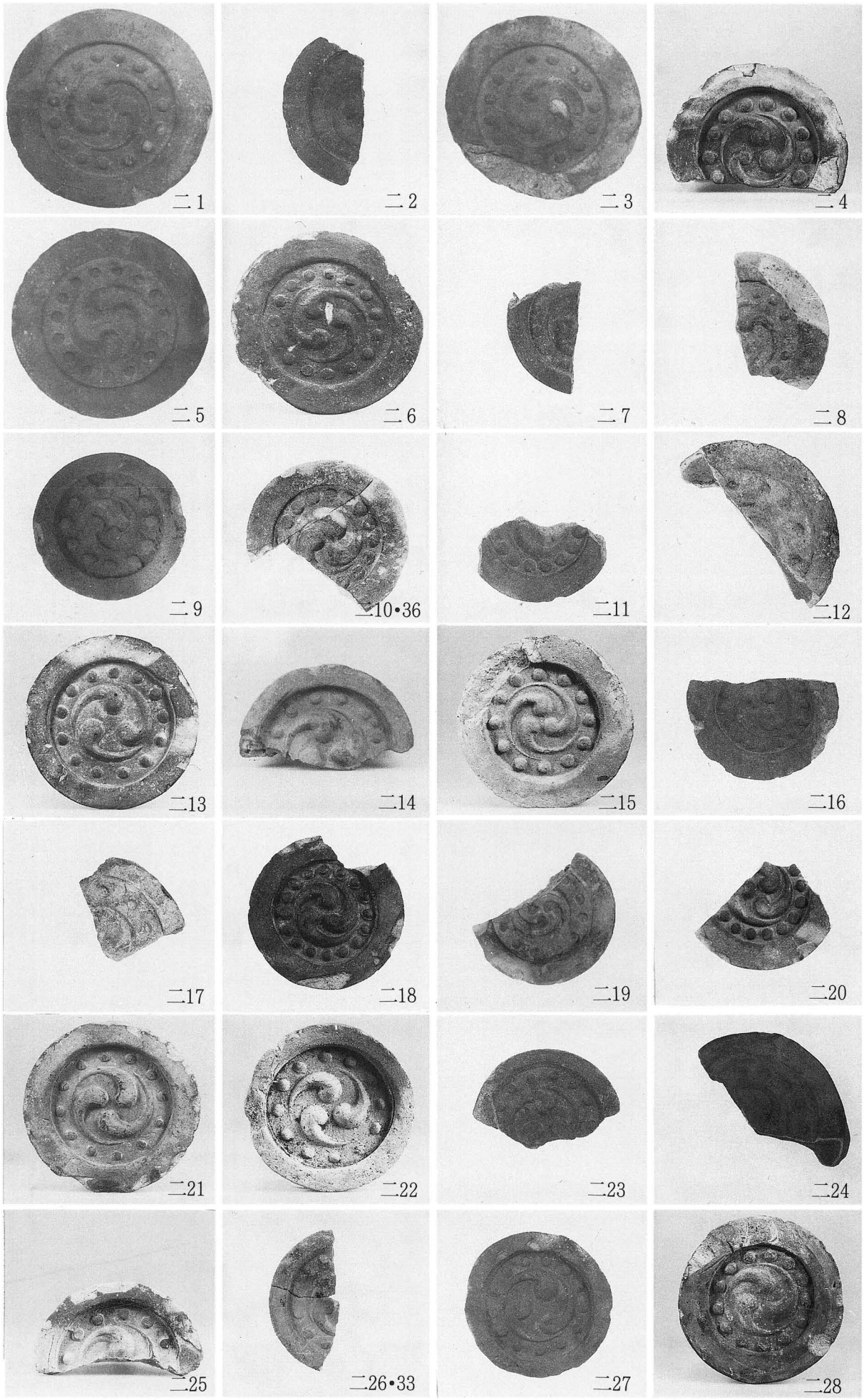
1.T－1（北から）　3.T－7（西から）　5.T－8（東から）　7.T－11（西から）　9.T－13（東から）
2.T－3（南から）　4.T－7（東から）　6.T－10（東から）　8.T－12（西から）　10.T－15（西から）

図版3　本丸の調査(2)

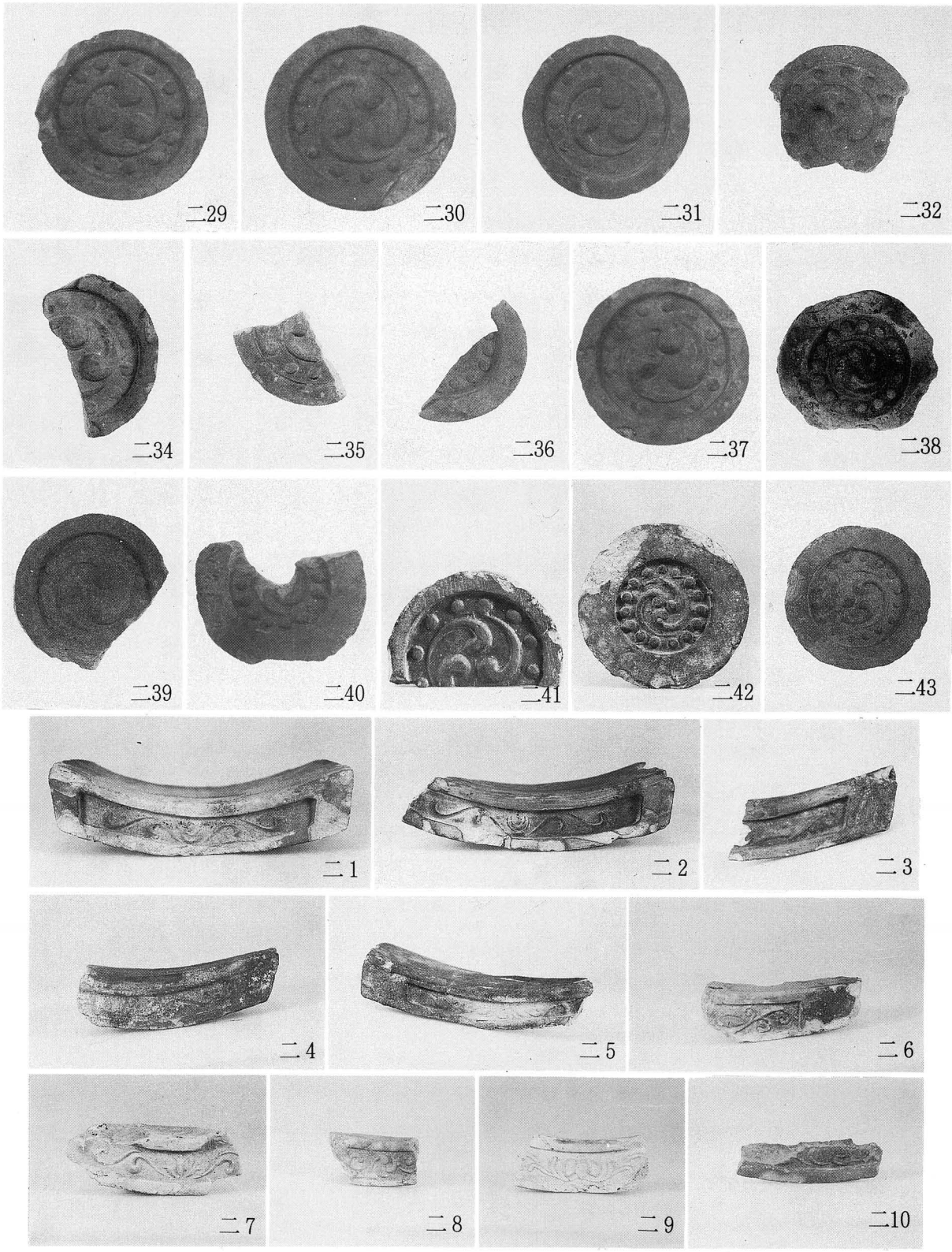
1.T－15（北から）　3.T－18（西から）　5.T－20（北から）　7.T－25（東から）　9.二の丸調査風景
2.T－18（南から）　4.T－19（南から）　6.T－24（北から）　8.T－25（西から）　10.本丸調査風景


本1
本2
本3
本4
本5
本6
本7
本8
本9
本10
本11
本12
本13
本14
本15
本16
本17
本18
本1
本2
本3
本4
本5
本6
本7

図版4　本丸軒瓦


二1
二2
二3
二4
二5
二6
二7
二8
二9
二10•36
二11
二12
二13
二14
二15
二16
二17
二18
二19
二20
二21
二22
二23
二24
二25
二26•33
二27
二28

図版5　二の丸軒瓦(1)


二29
二30
二31
二32
二34
二35
二36
二37
二38
二39
二40
二41
二42
二43
二1
二2
二3
二4
二5
二6
二7
二8
二9
二10

図版6　二の丸軒瓦(2)

西奥田遺跡発掘調査概要

1．位置

西奥田（にしおくだ）遺跡は、津山市街地北方の平地との比高差約40ｍをはかる丘陵上に位置し、行政区は岡山県津山市大田498・503番地に属する。本遺跡は、津山リゾートセンター建設のため、岡山県教育委員会が平成５年度に実施した試掘調査によって、その存在が確認されたものである。その時の調査では、縄文時代早期の住居址１棟が押型文土器と共に検出された。住居址からやや南に離れて狩猟用の落とし穴遺構も１基発見されている。これら遺構が検出されたのは、北東から南西に向かって延びた丘陵の頂部付近ににあたり、丘陵の尾根沿いに走る市道2009号線の東側南北約200ｍ、東西約60ｍないし40ｍが遺跡範囲として認識された。遺跡の広がりは、市道の西側にも延びることが予想されていた。遺跡一帯は牧草地となっている。

Fig.1 位置図（国土地理院地形図「津山東部」を使用）S＝1：50,000

2．調査の目的と経過

遺跡に沿って走る市道2009号線拡幅（仮称都市計画道路大田野辺線）の計画が存在したが、上記試掘調査の結果、拡幅工事は西奥田遺跡の南半分にかかることが明らかとなった。ただし、該当部分については、未調査のため地下の状況は不明であった。このため、拡幅計画の策定にあたり、事前に該当する区域について試掘調査を実施し文化財保護上の資料を得ることを目的とした。

調査は津山市教育委員会が担当することとし、平成６年３月７かから同年３月29日まで実施した。調査区域は、市道の両側の拡幅予定幅10ｍまでの範囲と、西側への道路連結予定地である。市道東側の東区には、幅1.5ｍ、長さ60ｍのＴ１および長さ67ｍのＴ２の２本のトレンチを設定した。道路を隔てた西区では、幅1.5ｍ、長さ40ｍないし20ｍ程の４本のトレンチを設定して、東区からバックホーを用いて調査を開始した。

東区では、予定通り２本のトレンチの表土を除去したが、西区では牧草地造成の際の盛り土およびその下の耕作土と黒色土層の堆積が厚く、排土を置く場所が不足したので、トレンチの数をＴ３からＴ５までの３本に減らすこととした。

表土層等を除去した後、人力でトレンチ内を清掃し、遺構の存在した東区は引き続き遺構精査を行った。Ｔ１・Ｔ２の遺構検出状況から、南半分ににについては試掘溝間を拡張し、対象地内の遺溝は全掘することとした。実測と写真撮影をすませた後、もとどおりに埋め戻して発掘調査を終了した。

3．遺跡

東地区（Fig.３・４）　表土から30㎝程までは牧草地の耕作がおよび、黒灰色の耕土層となっている（１層）。耕土層の下は淡黄褐色粘質土からなる基盤層（３層）で、現状ではこの土層からは遺物は発見されていない。３層の上面は南西に向かって傾斜していて、１層の厚さは北半で約20㎝、調査区南西

端では約60cmに達している。

南半分から13基の近世墓を検出した。すべて火葬墓で、墓壙の平面形からA・Bの2種類に分類できる。

A類は長楕円をなし、長さ116~180cm、幅50cm前後をはかり、P2~4・8・9の5基存在する。墓壙両側辺の壁は、垂直に近く立ち上がるが、両端側は傾斜をもって外方に立ち上がる。このため、上部の削平の度合いによって墓壙の長さには多少の変化がみられる。P9だけは幅110cmをはかり、数値上は幅広の形状を示すが、これは幅70cmの細長い墓壙の両側辺上部が外に広がる2段掘りとなっているためである。遺存状態の良い本例が、本来のA類の形状を代表するものかどうかは不明で、むしろ例外的なものではないかと思われる。墓壙P3・4・8・9の両側壁面は加熱を受け赤変している。墓壙内には炭灰が充満し、銅銭、土器類、鋏や煙管といった金属製品が人骨片と共に出土した。すべての墓壙内から鉄釘が出土しているので、木棺に納められた遺体がここで火葬に付されたものであろう。

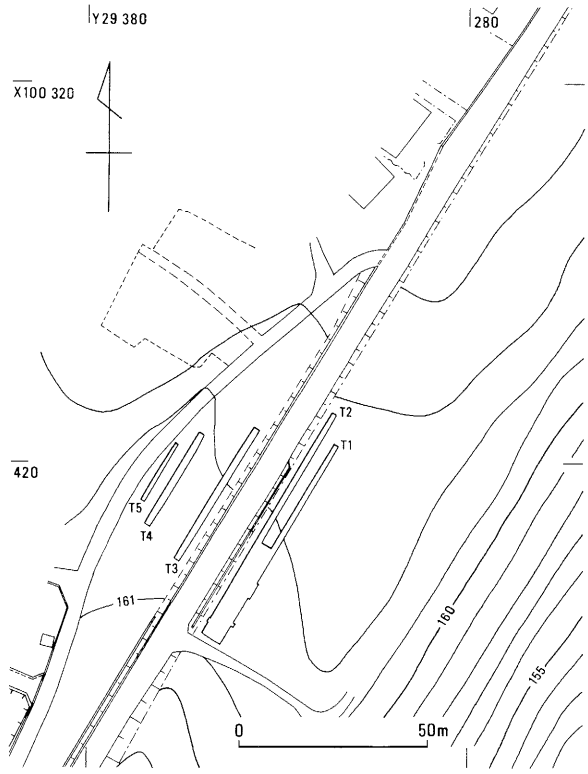


Fig. 2　調査区域図

B類は長さ60cm前後、幅40~50cm程度の、やや寸づまりの長方形のもので、P6・10~16の8基を数える。遺存する底面近くの部分では、四面の壁は、いずれもあまり傾斜せずに立ち上がる。A類同様、墓壙内には炭灰が充満し、いくつかの墓壙からは人骨片が出土していて、壁面の赤化は見られないものの、火葬によるものであることを示している。やはり、銅銭、土器などの副葬品が木質を残す鉄釘と共に出土していて、木棺を使用したことを示している。

これらの墓壙は、P2が長軸を東西方向にするのを例外として、いずれも長軸をほぼ南北に向けていて、ある程度の規則性がうかがえる。これは、頭位方向の規制による可能性の他に、南西に向かって傾斜した地形に対し、長軸が等高線と平行となる関係でもあり、墓地の地形からくる制約であった可能性もある。墓地の範囲については、南北約30m、東西は調査区外に延びる可能性があり不明だが、西地区のT3では検出されていないので、およそ30m以内と想定される。墓地の立地は、調査区南方の新池から北に延びた浅い谷に面した南西斜面の一画にあたる。

西地区（Fig. 3）　T3からT5までの層序は共通で、地表から順に20~60cmが黄白色造成盛土層（1a層）、20~70cmが黒灰色造成土層（1b層）、20~70cmが黒褐色土層（2層）、以下が淡黄褐色土層（3層）となっている。1a層は、近年の牧草地改良工事にともなう造成土、1b層は初期の牧草地造成の際の造成土で上部は耕作土である。2層はいわゆる黒ボク土で3層との境界は漸移し不明瞭である。本来は南から延びた谷部にあたり、2度に及ぶ牧草地造成により谷部を埋め立てているが、今もなお南にわずかに傾斜した平坦な窪地になっている。すべてのトレンチからは遺構・遺物ともまったく発見されなかった。

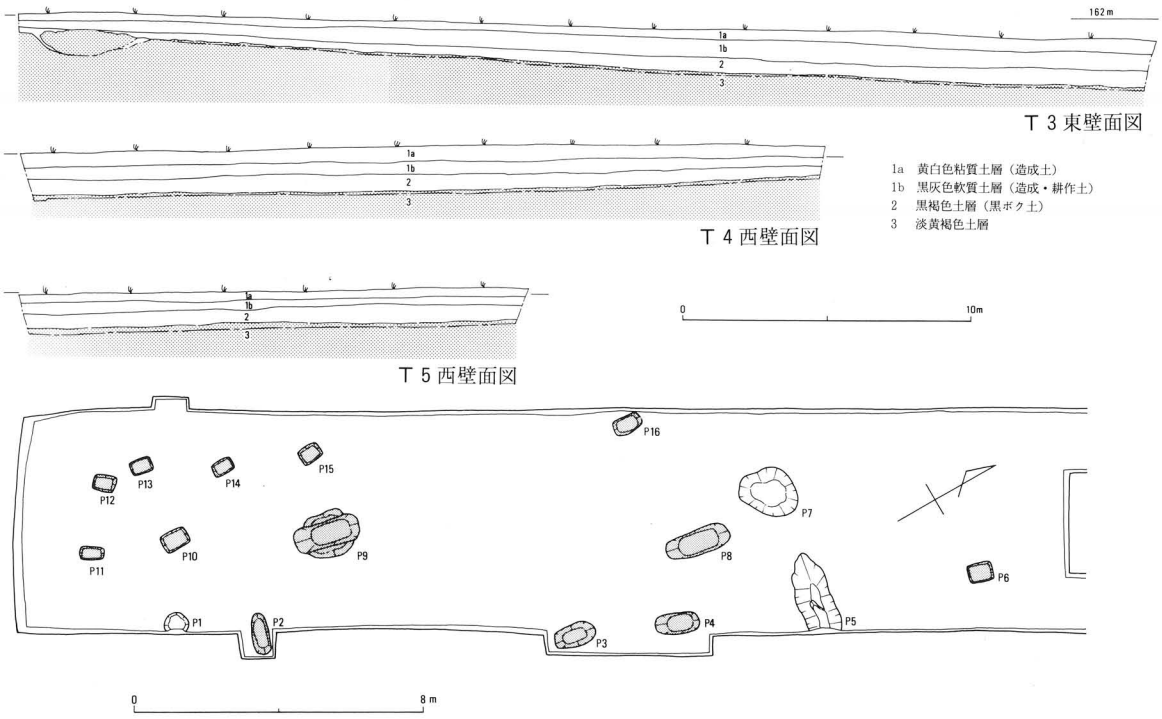


Fig. 3　調査区域実測図（上段 ： 西区トレンチ壁面図，下段 ： 東区遺構等配置図）

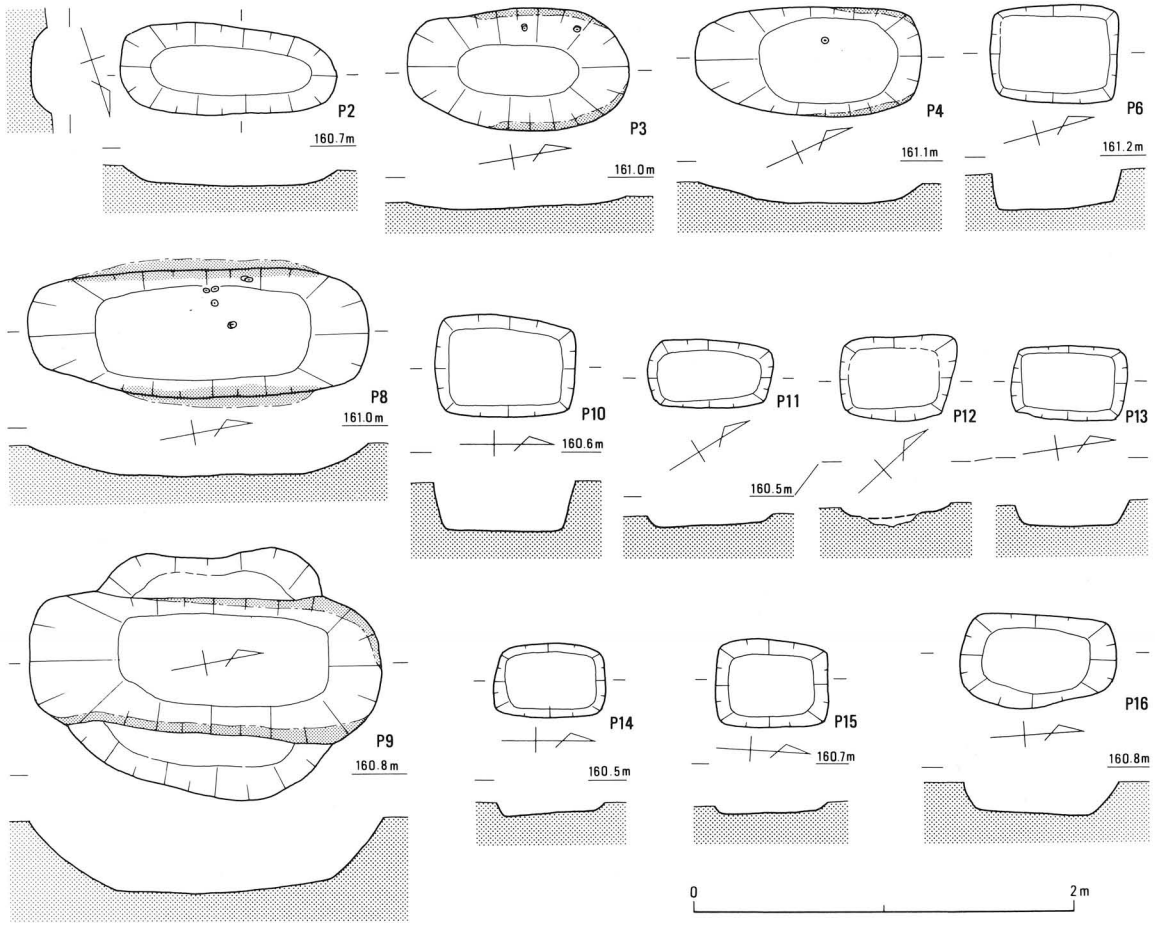


Fig. 4　近世墓実測図

番号	種　別	形態	寸法（長×幅×深）cm	出　土　遺　物	備　考
P 1	撹乱坑	円	66　54＋ 31	無	木根痕
P 2	近世墓	A	116　44　10	銅銭（不明3）、鉄釘1	火葬
P 3	近世墓	A	120　65　6	銅銭（寛永通宝2、不明3）、土師質小皿1 鉄釘3	火葬
P 4	近世墓	A	122　56　10	銅銭（寛永通宝9）、鉄銭1、銅製鉤状金具1 鉄製鋏1、土師質小椀1、磁器酒坏1、人骨	火葬
P 5	撹乱坑	不整	220＋　58　38	押型文土器片1	木根痕
P 6	近世墓	B	67　50　19	土師質小皿2、鉄釘1、人骨	火葬
P 7	撹乱坑	不整	165　131　14	無	火葬
P 8	近世墓	A	175　66　16	銅銭（寛永通宝10、不明1）、鉄釘4、土師質小皿1	火葬
P 9	近世墓	A	180　110　40	銅銭（寛永通宝6）、鉄銭4、鉄釘11、銅製煙管（雁首2、吸口2）	火葬
P10	近世墓	B	73　54　26	銅銭（開元通宝1、熙寧元宝1、紹聖元宝1 不明3）、鉄釘19	火葬
P11	近世墓	B	71　38　6	人骨	火葬
P12	近世墓	B	59　44　11	無	火葬
P13	近世墓	B	57　39　14	無	火葬
P14	近世墓	B	56　40　5	鉄釘1	火葬
P15	近世墓	B	57　43　5	鉄釘1	火葬
P16	近世墓	B	79　46　6	鉄釘1、人骨	火葬

Tab. 1　西奥田遺跡東地区遺構等一覧表

4．遺物

遺物の出土したのは東地区で、縄文土器と近世墓の副葬品等の遺物がある。

縄文土器（Fig. 5－1）　木の根によると思われる不整形の撹乱坑から1点の押型文土器が出土した。幅4.5cm、高さ2.5cm、厚さ1.0cmの口縁部破片で、内面に幅2cm程の左上がりの平行短線をもつ。外面はナデ仕上げで、押型文はつかない。白色ないし半透明の長石と思われる砂粒に富んだ胎土で赤褐色を呈し、小片のため全形は不明だが、波状口縁であった可能性もある。

近世墓出土遺物　副葬品には、銭貨、鋏などの金属製品、土師質土器、磁器がある。その他の遺物として木棺材ないし棺に用いられた鉄釘が出土した。

土師質土器としたものには皿（Fig. 5－5）、小皿（4・6）、小椀（3）がある。小皿（6）は底面を回転ヘラ切りしている。皿と小皿には精良な胎土を、小椀にはやや微砂質の胎土を用い、堅く焼き締める。他には白磁（2）の酒杯が1点あるだけで、土器類の副葬は全体に貧弱である。

金属製品には、鉄製鋏1点（7）、銅製鉤状金具1点（8）、銅製煙管4点（9～12）がある。鉄製鋏は全長13.1　、刃部長5.8cmの中型品である。銅製鉤状金具は、厚さ0.2cmの板材を加工したもので、先端を鋭利に仕上げ、基部に穿孔する。用途不明。煙管は2本分出土している。

木棺に用いられた鉄釘（13～26）は5.7cmから3.9cmの角釘である。釘に棺材が付着したP10例（20～26）とP13例（18）では、厚さ1.4cmから2.0cmの板材を用いており、材質は不明だが箱形の棺形態と考えられる。

依存した人骨はいずれも小片で、火葬の痕をとどめている。

銭貨（Fig. 6）には銅銭と鉄銭がある。銅銭は、渡来銭と寛永通宝に分けられ、前者には開元通宝（1）、熙寧元宝（2）、紹聖元宝（3）が各1枚ずつあり、これらはいずれも寛永通宝初鋳以前のものである。寛永通宝は、その可能性のあるものを含めると38枚が出土した。これらは大別して1636（寛永13）年初鋳のいわゆる古寛永通宝（4・5）、1668（寛文8）年初鋳の文銭（6）、1697（元禄10）年以降

鋳造された新寛永通宝（7～10）がある。1点の出土である文銭以外は、さらにいくつかの型式に分かれるようだが、細分は未了である。鉄銭は5枚が出土していて、いずれも錆の進行が激しく文字の存在自体が不明であるが、寛永通宝であると思われる。これらの銭貨には火葬時の熱で一部融解や変形を受けたものがある。

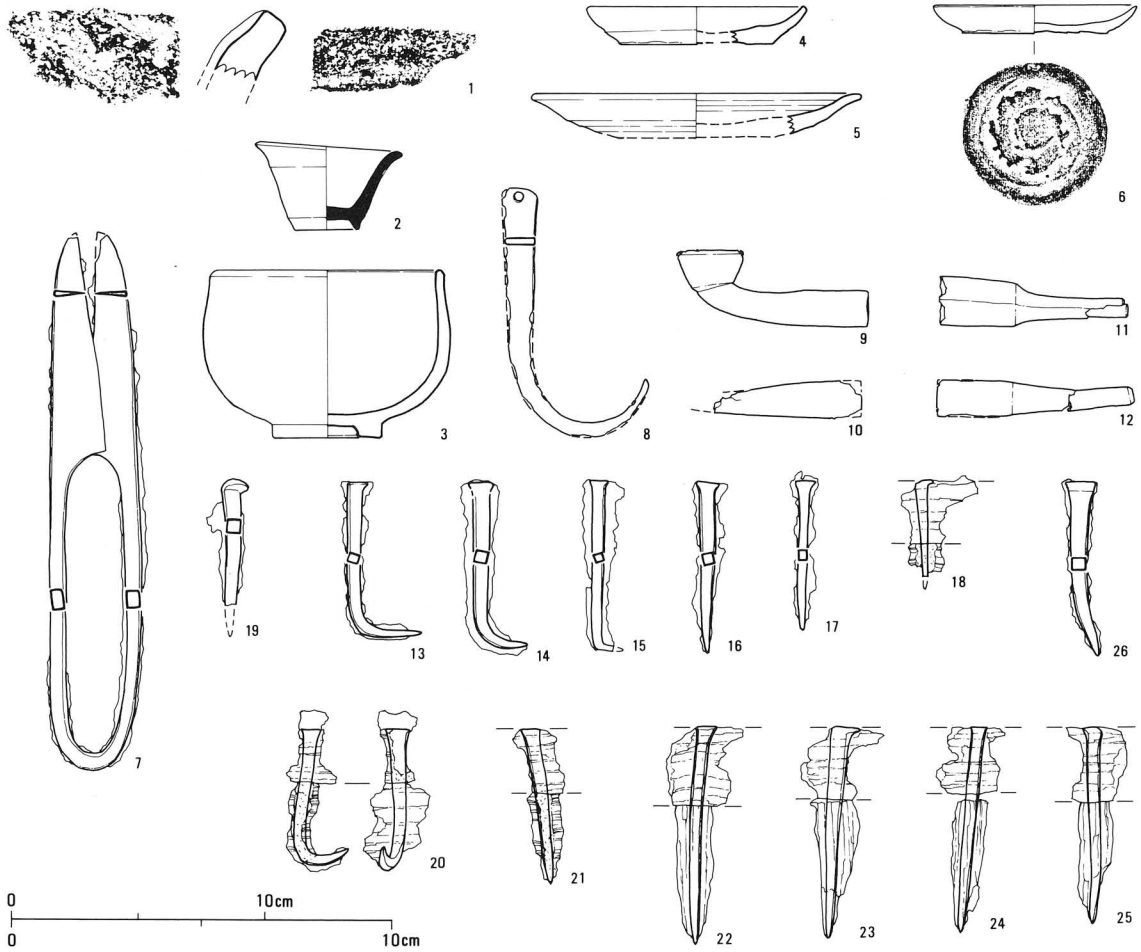


Fig.5　遺物実測図（2•3•7•8:P4, 4•5•19:P6, 9～12•13～17:P9, 21～26:P10, 20:P12, 6•18:P13）2～6…S＝1:3, 他…S＝1:2

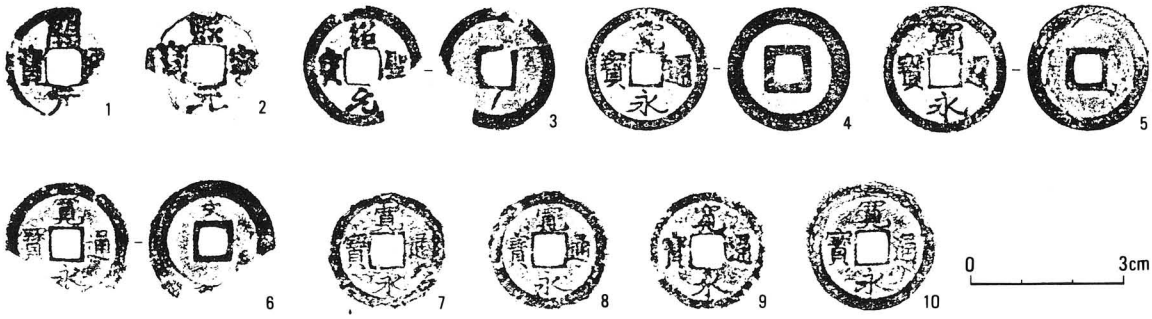


Fig.6　出土銅銭拓影（1～3:P10、4•5:P8, 6～10:P4）S＝2:3

5．結語

今回の調査地区は、西奥田遺跡推定範囲の南半部分に相当し、検出した遺構は東地区の近世墓のみであった。

縄文時代　東地区から押型文土器片が1点出土した。土器は、口縁部近くの小片のため表面の押型文型式は不明だが、内面の平行短線は幅広である。県教委調査の際、住居址から出土した土器と胎土とも共

通する（注１）ので、一連の遺物であろう。

ただし、遺構は存在せず、当初認識されていた縄文時代遺跡範囲の南限はやや北側に縮小することとなる。同時に、西地区は南から延びる谷地形にあたっていて、遺跡範囲は南半部分では市道の西側に広がることはなかったと判断された。本地方における当該期の遺跡は小規模であり、今回の調査結果もそのことを示すとともに、当該期の遺構形成が丘陵頂部付近に限定される傾向を読みとることが可能である。

近世墓　検出した近世墓は、理由は不明だがすべてが火葬墓で、土葬が一般的な当該期の葬制研究にとって貴重な資料となるものである。

その特徴は、火葬墓であることに加え、銭貨副葬の多さがあげられる。総数13基の墓の中、半数近くの６基から銭貨が出土した。津山市内では、これまで近世墓地の調査例は少数である。その中の二宮遺跡岡の山地区では、合計119基の近世墓（土葬）が検出されているにもかかわらず、銭貨を出土したのは４号墓の１基にとどまっている（注２）。

出土した銭貨には渡来銭および寛永通宝（注３）からなる銅銭と鉄銭がある。これらの組み合わせから墓の造営時期をある程度限定して位置づけることが可能となる。もっとも古く位置づけられるのはＰ10である。種類の判明した３枚の銅銭はすべて渡来銭である。銹着した３枚の銅銭の種別は不明だが、他の墓から多数出土した寛永通宝とは材質が異なり、これらについても渡来銭である可能が高い。次に位置づけられるのはＰ３で、不明の３枚を含め古寛永通宝だけの構成の可能性がある。他の例は、いずれも新寛永通宝を含んでいて新しく位置づけられる。このうちＰ４・９には鉄銭が存在し、最も新しいグル～プとなる。したがって、銭貨の構成からみた墓の変遷は、Ⅰ期（Ｐ10）→Ⅱ期（Ｐ３）→Ⅲ期（Ｐ８・２？）→Ⅳ期（Ｐ４・９）となる。

遺構番号	総数	渡来銭	寛永通宝					不明	備考
			古	文	新	鉄	不明		
Ｐ２	３							３	３枚銹着
Ｐ３	５		２					３	３枚銹着１枚加熱融解
Ｐ４	１０		１	１	４	１	３		５枚銹着
Ｐ８	１１		３		６		１	１	
Ｐ９	１０		１		４	４	１		
Ｐ10	６	３						３	４枚銹着

注　古寛永通宝と新寛永通宝との区別は表面の字体等の観察による。新寛永には銹着のため裏面が観察できないものがあり、この中には文銭が存在する可能性がある。

Tab.2　西奥田遺跡出土銭貨一覧表

Ⅰ期については、３種の渡来銭のうち最も新しい紹聖元宝の初鋳年が1094年なので、Ｐ10の造営年代は1094年以降、寛永通宝初鋳の1636年以前の可能性が高い。また、Ⅳ期は寛永通宝鉄銭の初鋳年である1739（元文４）年以降に属する。

出土銭貨から得られる編年のうち各期の下限の年代については、新たに鋳造された貨幣が直ちに広範囲に流通したことを前提とするもので、蓋然性を示すに過ぎない。いっぽう、先に述べたように、これらの墓壙は一定の規則的な方位をとっていて、本墓地が比較的短期間に連続して造営された様相を示している。このことからⅠ期については古寛永通宝初鋳直前の年代を考え、本遺跡は17世紀前半から18世紀中頃の約100年間にわたって形成された墓地と考えておく。ただ、墓地を全掘していないので、充分に評価できないうらみがあるが、この場合でも造営期間に対して墓壙数が極端に少ないこととなる。こ

のことについては、火葬という当時では異色な埋葬方式の評価とともに今後の検討課題としたい。

これらの銭貨は、いわゆる六道銭とよばれるもので、三途の川の渡し銭などといわれている。出土枚数は6枚のものが1例あるだけで、3枚から11枚までと一定しない。こうした出土状況は、墓壙自体の削平が激しいことから、現状を保っていないことも想定できるいっぽう、10枚以上出土した墓壙例が3基、全体の半数に及ぶことからみて、本遺跡においては6枚セットの副葬自体が普遍的ではなかったといえる。（安川豊史）

注1　岡山県教育委員会岡本寛久氏と共に比較検討することができた。

注2　岡山県教育委員会1978『二宮遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28）4枚の寛永通宝が出土していて、古寛永通宝1、文銭3の構成である。

注3　寛永通宝の観察については、岡山市教育委員会神谷正義、乗岡　実の両氏から関係文献の提供と教示をいただいた。記して感謝する。

参考文献

小川　浩編1960『寛永通寶銭譜』

櫻木晋一1993「席田青木遺跡の六道銭」『席田青木遺跡1』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第356集

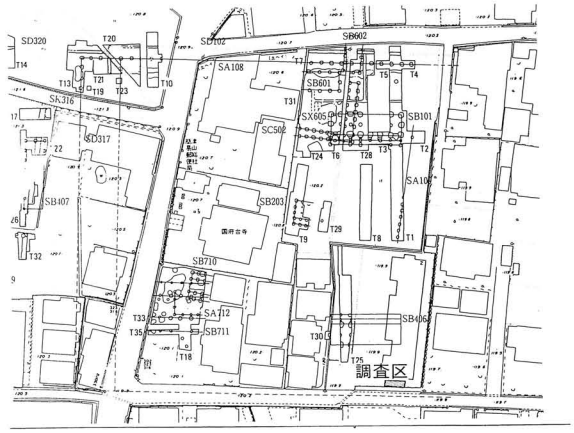
鈴木公夫1993「渡来銭から古寛永通宝へ－出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元－」『論苑考古学』天山舎

東区全景

美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要

1．はじめに

美作国府跡は津山市総社に所在する。美作国は和銅６年（７１３年）に備前国の北６郡を分割して設置された。美作国府跡は岡山県教育委員会・津山市教育委員会によって数回の調査が行われ、その詳細が明らかとなりつつある。今回報告するのは国府中心部推定域の住宅造成に伴う調査であり、遺構面を破壊する浄化槽部分のみの確認調査である。



第１図　調査位置図

2．調査に至るいきさつ

昭和60年４月19日、美作国府跡推定中心地である津山市総社33-4番地の水田が埋め立てられているのを津山市職員が発見した。同日土地所有者である総社44番地の小林繁行氏宅にて事情を伺ったところ、水田を埋め立てアパートを建設の予定であることが判明した。翌日同地の保存協議を行い、アパートの基礎水準を上げ基礎工事部分についてはすべて盛土内で施工すること、掘削の避けられない浄化槽設置部分については工事前に発掘調査を実施することとし、同日付けで以上のことを「津山市総社33-4番地における建築工事に関する文化財保護のための覚書」として取り交わし、文化財保護法57条の２の規定に基づく発掘届を受理した。

アパートの基礎工事掘削は昭和60年４月23・24日に行われ、津山市職員が立ち会ったが、すべて盛土中で行われたことを確認した。

また、浄化槽部分の発掘調査は昭和60年５月22~25日まで実施した。

3．調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

津山市教育委員会	教　育　長	福島祐一
	教育次長	藤田公男
	文化課長	内田康雄
	文化係長	籾山三千穂
	文化課主事	中山俊紀

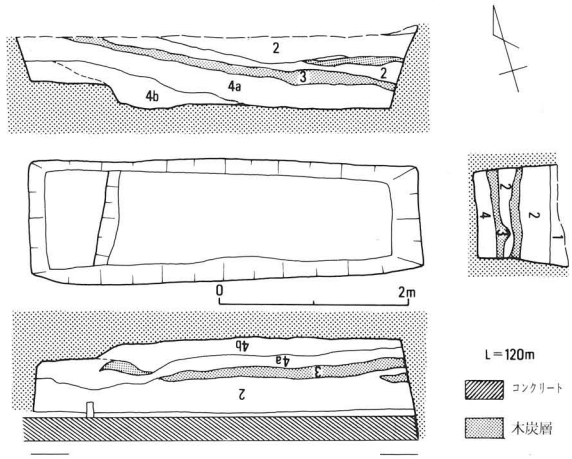
調査作業員　大郷貴美子　末広みよ子　高谷久枝　日笠あさ代

4．調査の概要

現在の知見によれば調査地点は政庁を画すると考えられる柵列（あるいは築地塀）の推定範囲の内側に位置する。すなわち政庁域内と推定される場所である。しかしながら調査当時はこの周辺は本格的な発掘調査は行われておらず、推定政庁域であることは知る由もなかった。いわば手探りの状態の調査であり、調査面積もわずか６㎡のトレンチ調査である。それ故明確な建物等の遺構は検出できず、地山面で南北方向に延びると推定される20cm程度の段差を確認したに過ぎない。

5．出土遺物の概要

出土した遺物はコンテナ７箱程度であり、中世の土器を若干量含むが大半は古代の土器・瓦類と考えられる。図示したのはほぼ大きさを復元可能な須恵器・土師器・瓦類である。以下その概要を述べる。第３図の１～22は蓋である。１・２のように輪状のつまみを持つものと３～12のように宝珠つまみを持つもの、13～22のつまみの有無が不明のものに分けられる。１・２はいわゆる稜椀に伴う蓋であるが、椀自体は出土していない。この蓋は他のものとくらべて胎土・焼成とも良好であり、ていねいに作られている。２～12はいずれも偏平な宝珠つまみがつくものであり、天井部は丸みをもって端部へ下るものと端部近くで屈曲させて段をなすものとがある。また、いずれも口縁端部で大きく下方へ屈曲させている。13～22も２～12と同様の特徴を持つものである。これらの破片中、あるいは図示し得なかった破片中にも確実につまみを持たないものは存在しなかった。また、これらのうち半数以上は内面に墨が付着していたりつるつるに磨滅していたりしており、硯に転用されていたことがうかがわれる。24～27は皿である。口縁は短く、やや外反するものと直立気味にのびるものがある。底部はいずれも回転ヘラ切りである。28～33は高台の付かない杯（杯Ａ）である。底部から後円部へ直立気味に立ち上がるものと、やや外反気味に斜め上方へ開くものがある。底部はいずれも回転ヘラ切りである。34～47は高台の付く杯（杯Ｂ）である。34～39のように口径に対して比較的器高の低いもの（杯ＢⅠ）と40～47のように器高の比較的高いもの（杯ＢⅡ）が認められる。34～39はいずれも体部は底部から斜め上方に立ち上がり、口縁端部でわずかに外反させている。底部は回転ヘラ切りでその後にナデているものと未調整のものがある。40～47は体部が斜め上方へ直線的に立ち上がるもの（40・44）とゆるやかに外反するものがある。48～50は土師器杯である。いずれもややふくらみを持つ底部から斜め上方外反気味に体部が立ち上がる。23は混入の勝間田椀である。回転糸切りの底部から体部が内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロナデが顕著である。



1．暗褐色粘質土（現水田耕土）　2．暗灰褐色土（拳大のレキを含む）　3．木炭層
4a．暗灰色土　4b．暗灰色粘質土

第２図　調査トレンチ平立面図

第４図は壺・甕の口縁部である。１～４は甕の口縁である。５は短頸壺であり、胴部外面は横方向のカキ目、内面は同心円当て具痕が認められる。

第５図は瓦類である。１～３は軒丸瓦、４・５は軒平瓦、６～11は平瓦である。１・２は美作国府跡軒丸瓦Ⅰａ種である（註１）。複弁８弁蓮華文で、直線的に傾斜した外区外縁に凸鋸歯文、外区内縁に２重圏線をめぐらせるものである。大形の中房内には１＋８の蓮子を配し、複弁は中央に界線を伴い各弁ごとに子葉を置く。細長い蓮弁の基部は中房を取り巻く圏線に接する一方、弁端は外区内縁の圏線に接しない。また間弁はＹ字形に開く形態で、蓮弁の形状は高く隆起する。３は軒丸瓦Ⅰｂ種である。Ⅰａ類と同様の特徴を持つが、間弁は楔形を呈する。笵の磨滅が著しい。４・５は軒平瓦Ⅰａ種である。破片であるが同笵例を参照すると、花頭基部が上外区界線に接し中心葉は花頭端部に接しない、各単位の第２子葉は肉太である、という特徴を持つ。また中心葉左端と花頭部の間に笵傷の認められるものがあるが、本例ではあきらかではない。６～11は平瓦である。いずれも破片であり、全形を知ることがで

きるものはない。桶巻作りを示す確実なものはなく、粘土板による一枚作りと考えられる。凹面はいずれも布目である。6・7は凸面が平行叩きであり、凹面狭端部に面取りを施す（Ⅱ類）。暗褐色を呈するものである。8は凸面に格子目叩きを施すものである（Ⅲ類）。須恵質で青灰色を呈するもので、1点のみの出土である。端部に面取りは認められない。9～11は凸面が縄叩き目のものである（Ⅰ類）。9・10は凹面の布目は不調整であるが、11は布目の上を横方向にナデている。いずれも両側面と狭端部に面取りを施しており淡褐色から灰白色を呈する。出土瓦の9割以上がこのⅢ類である。

6．まとめ

以上、調査の概要と出土遺物について述べてきた。現在の知見と照らし合わせて若干のまとめを行いたい。

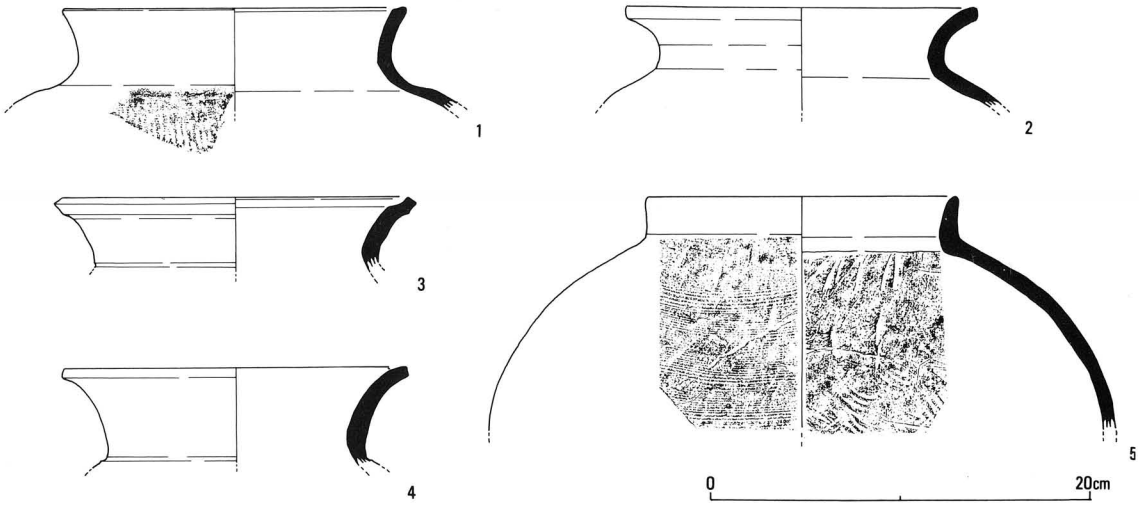
まず遺構部分であるが、南北方向に延びると推定される落ち込みの性格は不明であり、国府との関係も明らかではない。トレンチの地山のレベルを付近の既調査区のレベルと比べてみると、北西へ約25mの地点のT25において脇殿と考えられているSB406の柱痕跡の検出面よりも、約20～40cm低い面で本トレンチでは地山となっている。さらに本トレンチの南西約30mに位置するT36においては地山面はさらに約40cm程低くなっており、北から南へ向けて旧地形が徐々に低くなっていることが理解される。また遺物はほとんどのものが第3層木炭層及びその上下付近に集中しており、土器自体に火を受けた痕跡ははっきりしないが、あるいは火災に伴う整地であろうか。

次に遺物はトレンチ調査であり一括遺物とは言い難いが、前述のごとく3層を中心に出土しており、若干の時期差が認められるようであるがおおむね奈良時代後半から平安時代前半に位置付けられよう。瓦も軒瓦がいずれもⅠ類であり、丸瓦・平瓦もそれらに伴うものが大半を占めており、それ以降に時期の降るものをほとんど含まない。また土師器が圧倒的に少ないことが特徴として挙げられる。これは美作国府に限ったことではなく美作国全体の一般的な傾向であるが、美作国府跡の調査によっても、8世紀中葉までに位置付けられる一括遺物については土師器杯・Ⅲ類がある程度の割合を示すのに対して9世紀中葉以降はその割合を減じていく傾向が認められる（註2）。

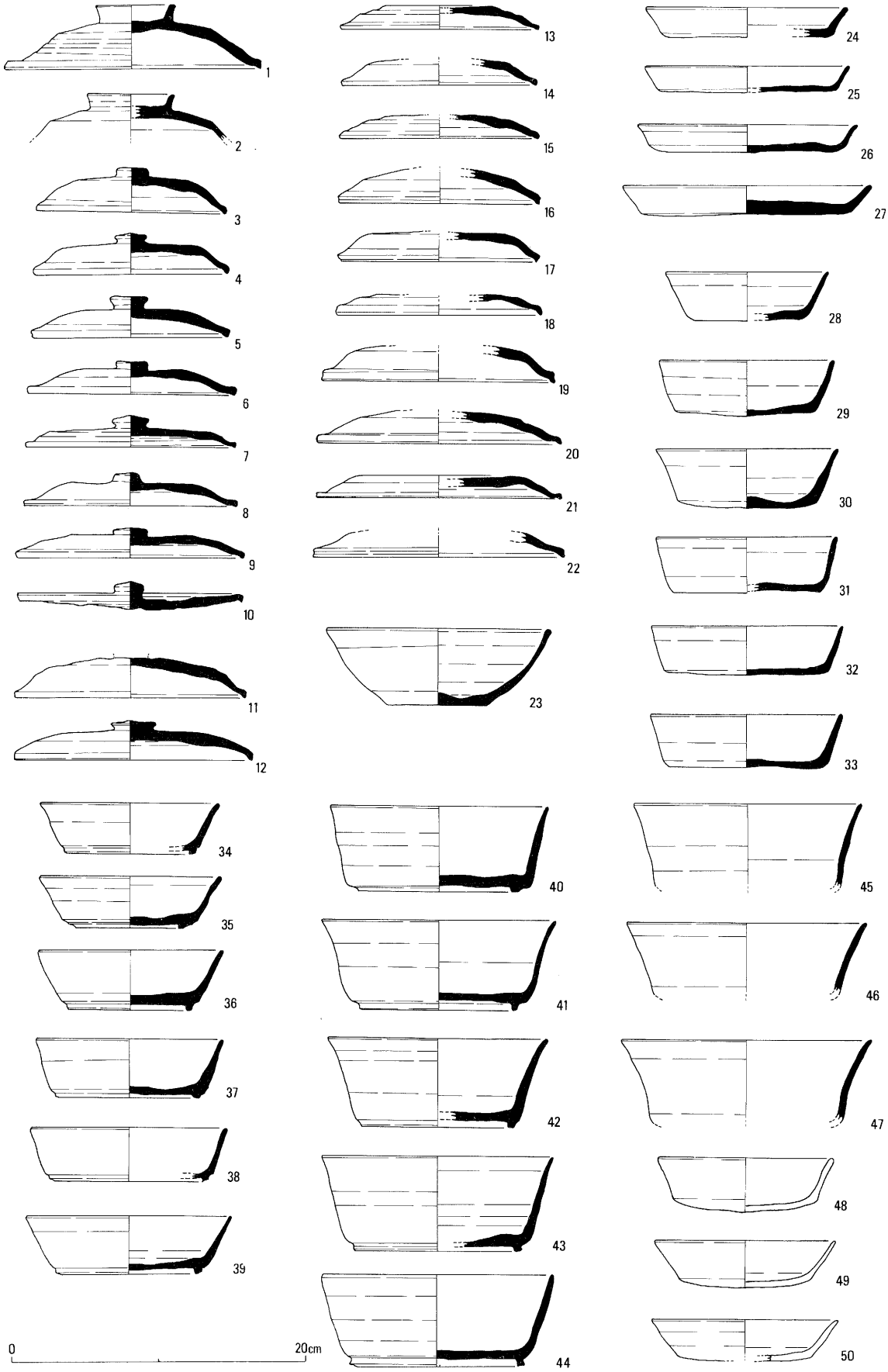
いずれにしても今回の報告は量的にはごく僅かなものであり多くを語ることはできない。それ故、いまだその全容を明らかにしたとは言えない美作国府跡の実態および美作地域の古代の土器様相を明らかにするうえでのひとつの資料の提示にとどめておきたい。　（平岡正宏）

（註1）以下、軒丸の型式については、安川豊史『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集による。

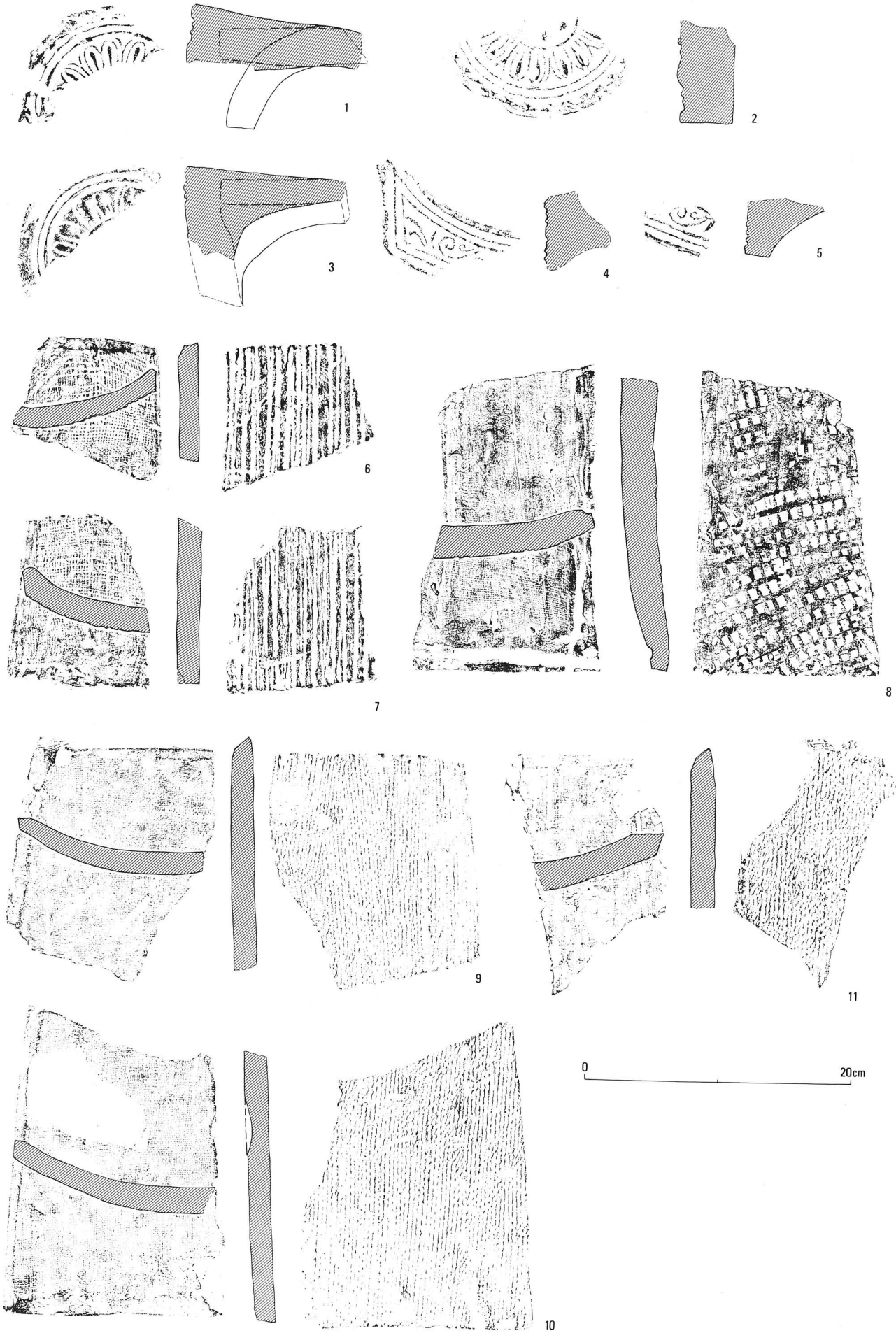
（註2）註1文献



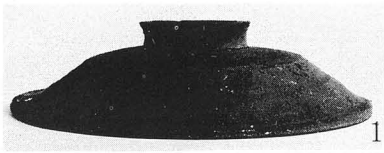
第4図　出土遺物(2)

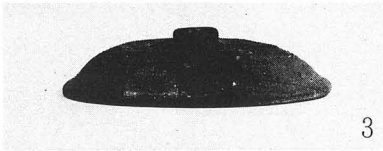

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
20cm

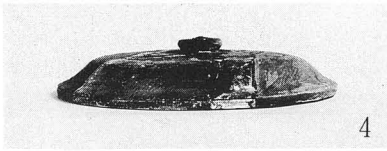
第3図　出土遺物(1)

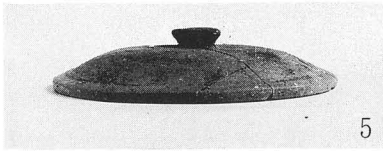


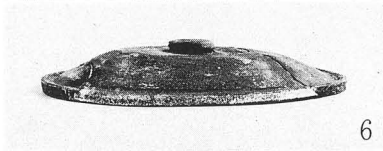
第5図　出土遺物(3)

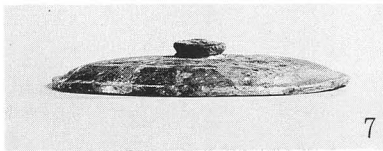

1

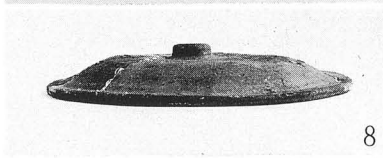

3

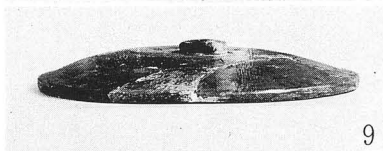

4

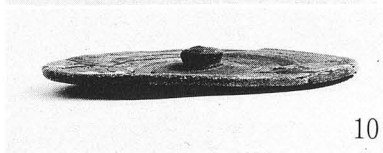

5

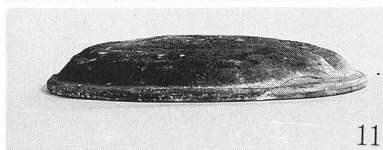

6

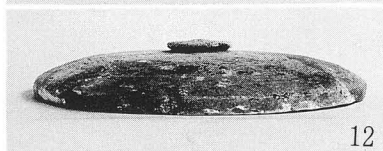

7

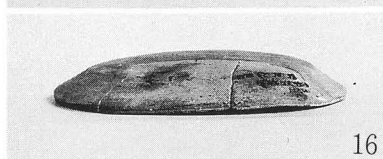

8

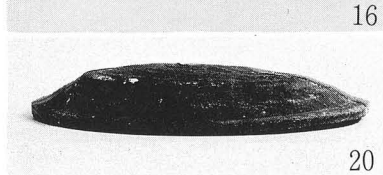

9

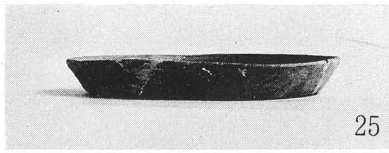

10

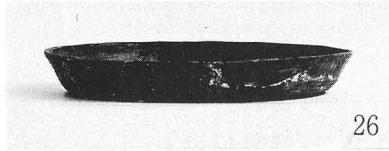

11


12


16

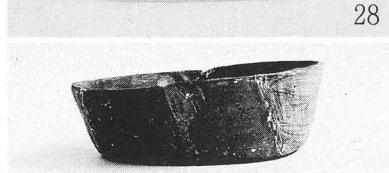

20

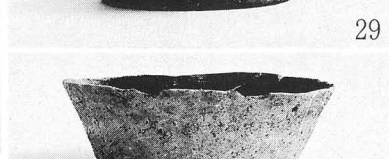

25

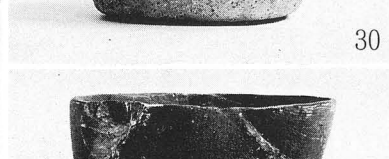

26

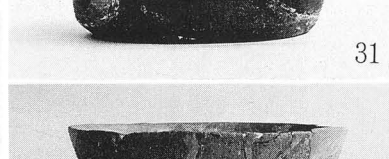
27

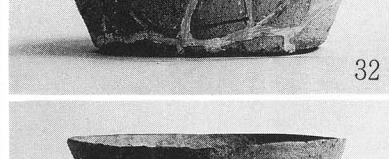
28

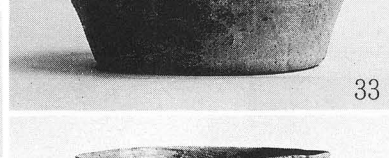

29

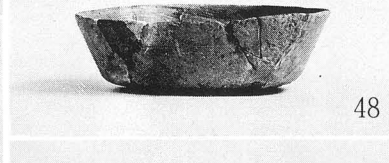

30

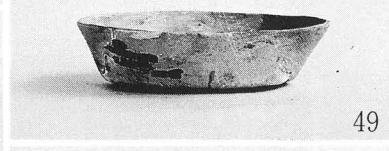

31


32

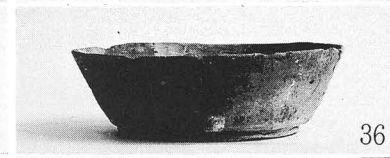

33

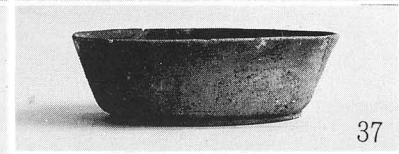

48

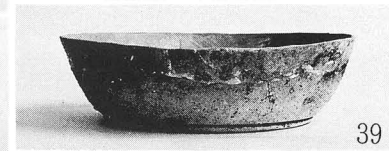

49


50

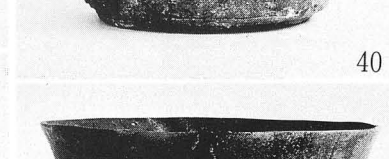
35


36


37

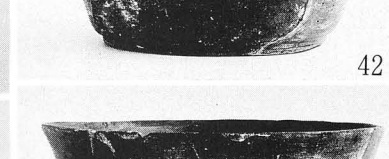

39

40


41

42

43


44

23

出土遺物